

---

# 霧の魔法

美月 純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霧の魔法

### 【Nコード】

N4214D

### 【作者名】

美月 純

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生の男女の出会い。恋に落ちた二人はやがて悲しい別れを迎える。そして、その後の不思議な体験を通して、一人の少年が大人になっていく。

## 第1話：出会い

確かこんな霧の深い夜だった。  
あいつと出会ったのは・・・

「あぶない！」

「キヤー！」

キキッ！ガシャン！

「あつつ、いててて。」

「ちよつと！どこ見て運転してんのよ！」

「そつちこそ急に飛び出てくんじゃねえよ！霧で見えなかったんだからな！」

「あんたが無灯火なのがいけないんでしょ。しかもこんな霧なのに飛ばして！」

「急いでたんだよ。もうすぐ店が・・・あ！いけね！」

「ちよつと逃げるの！どうしてくれるのよ。このカップ割れてるかもしれないわ！」

「知るかよ。俺は急いでんだ。しかも転んだのは俺の方で怪我までしてるんだぞ！カップぐらいでがたがた言うな。治療費請求しないだけましだと思え！」

「なんですって！いいわ、警察呼ぶから、自転車だって人を跳ねそうになったんだから、立派な事故ですからね！」

そういつて絵羽<sup>えは</sup>は携帯を出し、電話しようとした。

「ちょ、ちょ待てよ！警察なんて呼んだって無駄だよ。むしろそんなことで呼び出すなって説教食らうただぞ！」

絵羽は宙の言葉を無視してカップが割れていないか確かめた。

「ほら！やっぱり割れてた！どうしてくれるのよ！あなたがこの力ツプを弁償してくれないなら、警察に連絡します。それで、裁判にでも何でもしてやるわ！」

「無茶言つなよ。たかがカップで・・・」

「たかが？あんたにとっては何かがただだね。あたしにとっては彼にあげる大切なプレゼントだったのよ！それを、それを・・・うつ。」

「おいおい、泣くことはないだろ。わかったよ。あ！あっちゃー参った。店終わっちゃったよ。また延滞だ。」

「延滞？なによ・・・レンタルビデオ？」

「そうだよ。今日返さなかったら二日も延滞だ。もう、いいよ。店終わったから。それで、そのカップいくらすんだよ。」

「うつつ、ひつく、五千元。」

「え？五千元？！そんなにすんのカップに？ちよつと待って、今手持ちがないよ。ちよつと待ってくれる。」

「待っていつまでよ。彼の誕生日あさつてよ。それまでに買わないと。しかも名入りだから特注よ。出来るのに一日かかるの。だから、明日には注文しないと。」

「明日？明日の何時までその店やってるの？」

「七時まで、でも、注文は六時で締め切るの。」

「六時だな。わかった。えっと、あんた名前は？」

「絵羽、――ノ瀬絵羽。」

「エバ？変わった名前だな。」

「ほつといてよ。あんたは？」

「俺？俺は、宙、江口 宙。」

「ソラ？お空のソラ？」

「違う！宇宙の宙って書いてソラって読むんだ。」

「宙？それでソラ？あんたこそ変わってるわよ。」

「ほつといてくれ。じゃあ、念のため携帯教えておくから。明日五時にここでもいいか？」

「いいわよ。明日五時ね。絶対よ！逃げたら承知しないんだから。」  
「逃げるかよ。ほんとはこっちが治療費出して欲しいくらいなのに。あついでて。」

「あ！血。」

そういつが早いか、絵羽は宙の肘から流れる血を自分のハンカチで押さえた。

「あつ！いいよ。ハンカチ・・・よこれちゃうから。」

「いいわよ。貸しておくから、ちゃんと洗って返してよね。」

「ちえ、わかったよ。じゃあ・・・借りとく。」

「じゃあ、明日五時ね。忘れないでね。」

「わかったよ。」

そうして二人はお互いの携帯番号を交換して別れた。

「と、いったもののどうしよう。五千円か、バイト代はまだだし、親から貰うわけにもいかないし。困った。明日までに五千円なんて大金、どうかき集めればいいんだ・・・。」

途方にくれながら歩く宙。

「そうだ、確か貯金が。」

帰ってきた宙は二階に駆け上がると、押入れの戸を開け、ガラク  
タを引っ張り出し、奥から古い豚の陶器の貯金箱を出した。

「これだ！」

振ってみると結構重みがある。

「よし、でも、ずいぶん昔から貯めてたんだよな。高校に入ってからはずっかり忘れてたけど。確か小1くらいから貯めてたから結構あるかも。」

そして、さらに押入れから金槌かなづちを取り出した。

「うーん、いざ割るとなると惜しいな。でも、仕方ない。」

思い切って振り下ろした金槌は豚の貯金箱を粉々にした。

「ちょっと！宙！何時だと思ってるの！いい加減に寝なさい！」  
「やっべえ、お袋起こしちゃった。はいはい！寝ますよ！」

貯金箱の中からは数枚の札と一緒に小銭が結構入っていた。

「やった。これなら五千円くらいあるかも。」

数えてみると一万ちょっとあった。

「やった。これなら、足りる。しかも、臨時収入だ。豚さんには悪いけど、助かったよ。ちゃんと葬ってあげるからね。」

そういうと宙はこなごなになった豚の貯金箱をかき集め、ビニール袋に入れて、庭に出た。

スコップで小さな穴を掘るとその中に豚の貯金箱を埋めた。

「豚さんごめんなさい。でも、おかげで助かりました。感謝します。」

そう言って手を合わせた。

部屋に帰って、机の上に絵羽から借りたハンカチが置いてあった。

「絵羽・・・ちゃんか、いくつたる彼女？ちょっとかわいかったな・・・いかん、いかん、彼氏いるって言うてたじゃないか。第一この金はその彼氏のために支払うんだから。」

そういいながら、もう一度ハンカチを手に取ると、ギュツと握り締めて、窓から空を眺めた。

「明日はこの霧が晴れるかな。」

翌朝は快晴だった。

学校から帰ると、荷物を置き、汗だくになっていたのでシャワーを浴びた。

「どこ行くんだよ。勉強もせずに。来週から期末だろ。」

「わかってるよ。友達に返さなきゃいけないノートがあるんだよ。テスト勉強の。」

「へえ、めずらしくやる気出したじゃない。じゃあ、今回は期待できるね。春みたいな成績じゃ大学なんて行けないからね。」

「別に大学だけが人生じゃないよ。じゃ！行ってきます！」

「なまいき言ってるんじゃないよ。誰がここまで育てたって思ってるんだい！」

母親の怒鳴る声を尻目に玄関を飛び出した。

「時間前だな。来るかな？彼女。」

そう思ったとたん後ろから声がした。

「わあ！来てた！びっくり！」

「なんだよ。その言い草は。逃げるとでも思ったのかよ。」

「思った。だって、あんな約束守る人のほうが少ないでしょ。」

「マジで言ってるの？俺ってそんなに信用なさげに見えた？」

「見えた。だって、人を轢き殺そうとしたんだから、信用なんてす



るわけないでしょ。」

「轢きころ・・・おいおい、ちよつと人聞き悪いな。あれは事故だろ。しかも、怪我をしたのはこっち・・・。」

そついい終わらないうちに絵羽が宙の腕をグツと捕まえて肘を見た。

「大丈夫だった？血、止まった？あー、跡になっちゃったね。かわいそ。」

掴まれた手を振り払うと、

「大丈夫・・・だよ。ちよつと擦りむいたただだから、すぐ治るよ。」

「ちゃんと薬つけた？ばい菌が入ったら大変なんだから。」

「プツ、ばい菌って・・・君いくつ？あははは！」

「なによ！人が心配して言ってるのに。ばい菌が入ったらそこから腐って腕とれちゃうんだからね！」

「はいはい、ありがとう。せいぜい気をつけるよ。ところで、金持って来たよ。」

「あつ、うん。ありがとう。」

「はい、まず千円札二枚、百円玉十枚、五十円玉二十枚、十円玉・・・百枚。これで、五千元。耳そろえて払ったからね。」

「ちよ、ちよつと！なにこれ？あんた嫌がらせ？確かに五千元だけど、何よこれは、あたしのこと馬鹿にしてるでしょ！」

「ちよ、ちよつと待って。怒らないでくれよ。俺だつてちゃんと金

があれば払いたかったけど。手持ちの金、かき集めたらそうになったよ。貯金箱割ってさ。」

「貯金箱？」

「う、うん。子どものころから貯めてた豚の貯金箱。陶器のやつ、それ割って、やっと五千円集めたんだ。だから、許してくれよ。」

「え？そんな大切なもの。あたしのために割ってくれたの？」

「いや、別に大切でも何でもないんだけど・・・実は子どものころから貯金していて、高校に入ってから忘れて押入れの奥にしまってたんだ。だから気にしないで。でも、それで勘弁してよ。」

「・・・ごめんね。なんか悪いことしたみたい。」

「いや、マジで、気にしないで。ほんと、ただ、忘れててそこから出しただけだから。ほら、だから、千円札も、古いやつ。夏目漱石だろ？」

「ほんとだ?! 気がつかなかった。野口じゃないんだ。貴重だね。これ。」

「どうかな? 使つてあるから価値はないよ、きつと。とにかくこれで早く店行かないと、だろ。」

「そうだ! 今何時? いっけなーい。急いで、あんたも来て。このお金じゃ重いし、出す時ハズイから、あんた持ってきて一緒に支払って!」

そういうと絵羽は宙の腕をとって走り出した。

「おいおい! ちょっと、マジで、なんで俺が・・・。」

「男ならつべこべ言わない! 急いで!」

そうして宙は店まで連れて行かれた。

「すみません。昨日ここで買ったカップなんですけど。」

「ああ、いらっしやい。彼氏のプレゼントで買った人だね。」

「はい、実は・・・帰りに割ってしまつて。」

「ええ！割っちゃったの。まだ、一日も経ってないのに。」

「はい、事故で・・・。」

そついつと絵羽はチラッと宙を見た。宙はバツが悪そうにそつぽを向いた。

「で、返品とかきかないですよね？」

「それは・・・無理だね。名入りだったから、商品として出せるものではないし。」

「そうですよね。じゃあ、同じものもう一度お願いできませんか。彼氏の誕生日明日なんです。」

「そちらが彼氏さん？」

「いえいえ！」

二人声を合わせて否定した。

「なんだ。違うの？じゃ弟さん？」

「プッ！」

絵羽は思わず宙の顔を見て吹き出した。

「弟?!違いますよ。ただの・・・友達です。」

宙が不満げに否定した。

「あつそ、まあ、いいや。わかりました。じゃあ、料金は前払いでいいですか?明日のこの時間くらいにはお渡しできますけど。」

「お願いします。ほら、払って。」

そう促されて宙はしぶしぶ鞆から先ほど絵羽に渡した。小銭を力ウンターに置いた。

「は?なんですか、これ?ちゃんと五千円あるの?」

「あります!ちゃんと数えましたから。すみません。お金がこれしかなくて、お願いします!」

そういつて宙は深々と頭を下げた。

「ちょっと待ってください。数えますから。」

そうして店員が数え終わると支払いを無事すませ、店を後にした。

「きゃはは!」

「なんだよ。急に。」

「お・と・う・とだって!おっかしい!やっぱりあたしは大人に見えるんだわ!」

「なんだよ、それ、俺がガキっぽいつてことかよ。」

「そつなんじゃない?店員さんの言うにはね!」

「馬鹿にしゃがって。なんで金まで払って俺が恥かかなきゃいけな

いんだよ。頭まで下げて。」

「あつ、それは・・・ありがとう。あんたが頭下げてくれたからきつと引き取ってくれたんだと思う。感謝してるよ。」

「え？なんだよ。急に改まって。照れるじゃんか。」

「キヤハハ！単純！そういうところが弟とか言われちゃうんだよ。」

「なんだよそれ！いい加減にしてくれ。おちよくってるのか俺を。」

「ごめん、ごめん。感謝は、ほんと。ねえ、ところで宙はいくつなの？」

「え？（宙って呼び捨てして・・・）俺？俺は高二だよ。もうすぐ17。」

「えー？そうなんだ。じゃあ、タメじゃん！あたしも高二、もう、17になっちゃったけど。やっぱ、弟で正しいんだね。キヤハハ！」

「同い年だろ。誕生日がちょっと遅いだけだろう！」

「そうね。そうとも言っわ。いつなの誕生日？」

「俺？八月の十五日。」

「えーそれって終戦記念日じゃん。なんか・・・だね。」

「なんか、なんだよ！悪いか、終戦記念日で。」

「いや、悪くはないけど・・・それに夏休み中じゃん。ねえ、小さい頃嫌じゃなかった。夏休み中に誕生日って。ほら、幼稚園とか小学校とかでその月の誕生会とかあったでしょ。いっつも次の月の人と一緒でさ。」

「え？あ、うん、嫌だった。親も夏休み中だから忘れてたりしてさ。」

「え？親は忘れないでしょ。ふつう。」

「いや、うち商売やってって、特にお盆時期は忙しくって。世間のお盆休みはうちでは働いてんだよ。」

「なーに、商売って？」

「え？うーん、笑うなよ。仏壇屋。」

「仏壇屋？そんなのあるの？」

「あるよ。まあ正式には仏具店って言って、仏壇のほかにお盆の灯籠とかそういう売ってるのさ。」

「へえ、そうなんだ。ご両親でやってるの？」

「え？いや、うち、お袋だけなんだ。親父は俺が五歳の時に死んで、よく覚えてないんだよね。」

「あつ、ごめん。悪いこと聞いたね。」

「え、いいよ。もう、だいぶ昔のことだし、全然大丈夫。」

「兄弟は？」

「俺、一人っ子なんだ。女兄弟が欲しかったな。」

「そうなんだ。じゃあ・・・あたしがお姉さんになってあげる！」

「はあ？同い年だろ。なんだよ。お姉さんって？！」

「だって、弟って言われたじゃん！」

「それはあの店員の目が悪かったんだよ！」

「そうお？別に眼鏡とかかけてなかったけど。」

「コンタクトなんだろ！」

「うまい！きやはは、なかなかいいセンスしてるね。お笑いにいけるかも。」

「なんだよ。そりゃ・・・じゃ、俺こっちだから、金返したからね。これで恨みっこなしだよ。じゃ！」

「あつ、ちよつと待ってよ。ハンカチは？あたしが貸したハンカチ。」

「あつ、えつと、まだ洗濯が・・・。」

「へへえ、残念でした。あたしたちの縁はまだ切れそうもないわね。ハンカチ洗濯できたら呼んでね。そうだ。アドも教えとくね。」

そういつて絵羽から携帯メールのアドレスを教えて、宙にメールさせた。

「OK！これでメル友だね。あつメル姉弟きょうだいだね。」

「なんだよそれ。じゃあ、洗濯したら連絡する。じゃ！」

「あつ、待って。」

「なんだよ。」

「あの。ありがとう。ほんととは来るか来ないか半信半疑だったの。でも、宙は来てくれた。ありがとう。いい人だね。宙って。」

「え？」

そういい残すと絵羽は小走りに駆けていった。  
後姿を呆然と宙は見送った。

家に帰った宙は絵羽から借りたハンカチを眺めながらベットに転

がつていた。

「絵羽・・・か、なんかいいコだな。最初はなんだコイツって思ったけど・・・でも、このハンカチ返したらそれでもう会うことはないんだろうな。」

宙は、偶然に出会っただけのこなのになぜか惹かれて<sup>ひ</sup>いる自分に気づいた。



## 第2話：トモダチ

「おはよう!」

「おう、おはよ。」

「なんだよ宙、元気ねえじゃん?」

「ん?そうか、普通だよ。」

「おいおい、俺とおまえはガキの頃からの幼馴染おさななじみだろ。おまえの調子は一目見ればわかるんだよ。」

「美樹生みきお・・・おまえには嘘つけねえな。」

「やつぱ・・・で?どうした?」

「ん?ああ、まあなんていうか・・・。」

「なんだよ。それじゃわかんねえよ。」

「ああ、つまり・・・なんだよ。思春期ってことかな。」

「なんだそりゃ?ん・・・ああ!まさか、女?」  
「ん?まあ。」

「マジで?!出来たの彼女?」

「違うよ。出来てりゃ悩まんだろ。」

「そつか・・・じゃあ、片思いつてやつ?」

「んん・・・まだよくわかんないんだけど。」

「ふーん、なにどこのコよ?うちの学校?」

「いや、たぶん西高。」

「マジ？じゃあおまえより頭いいじゃん。」

「んなこと関係ねえだろ。そりゃうちよりランクは上だけど。」

「ふーん、じゃあ、なに、優等生タイプ？おまえそういうの趣味だったっけ？まさかメガネっ娘とか？！」

「俺はオタクだよ。アキバ系じゃねえってーの。」

「そっか、まあそういうタイプじゃないな。でも、じゃあ、どんなコよ。」

「んーなんていうのかな。背が小さくて、でも、けっこう顔立ちがはつきりしてて、見方によっては美人系。」

「なんかよくわからんなあ。例えばタレントとか、誰似？」

「タレント？んー誰だろ？最近のコじゃないなあ。」

「女優とかは？」

「女優？んー、ああ、蒼井恵。」

「蒼井恵？ああ、あの人ね。わかるけど、目がクリツとしててかわいい感じ？」

「うん、笑ってる顔がかわいい。でも、黙ってると美人。」

「ふーん、マジで惚れたな。おまえが何かに夢中な時って前見えてないから、わかるよ。」

「どういう意味だよ。マジでかわいいんだよ。」

「実物を拝まないとな。それにおまえの趣味ってイマイチわからんから。」

「じゃあ、会わせてやるよ。」

「え？会えるの？片思いじゃないわけ？電車男みたいに声もかけられないみたいな。」

「違うよ。話も出来るし、メルアドだって知ってるよ。」

「え？メルアドゲットしてんの？じゃあ、全然OKじゃん。片思いじゃねえじゃんよ。」

「違うんだよ。でも、彼氏いるんだよ。彼女には。」

「え？なにそれ？わけわからん。」

「だから話すと長くなんだけど・・・。」

宙は美樹生に今までのいきさつを話した。

「へえ、そんな出会いってあるんだ。でも、彼氏の誕生日プレゼントを買いに行かされたのが初デートかよ。」

「デートじゃねえよ。」

「悪い悪い。怒んなよ。でも、次に会えるのはそのハンカチ返す時間で、それ返したらサヨナラだろ？」

「ん・・・たぶんな。」

「たぶんな。ってそれで言い訳？」

「いいも悪いも仕方ないじゃん。どうしようも出来ないし。」

「どうしようも出来ないじゃねえだろ。とっちゃえよ。その彼氏から。」

「どうやって？それに彼氏も西高だろうし・・・勝ち目あるわけないじゃん。」

「恋は学歴ですんじゃねえだろ。男ならビシツと決めてこいよ。」  
「ビシツとも何も、相手は俺のことなんてなんとも思っていないし、  
どうしようもねえだろ。」

「なにビビツてんだよ。よし！ハンカチ返す時、俺がついていく。  
その絵羽ちゃんにコクレ。」

「おいおい、なんでいきなりコクルんだよ。意味わかんねえじゃん。  
嫌がられるに決まってるだろ。」

「そんなのやってみなきゃわかんねえだろ。もしかしたら彼氏とう  
まくいってないかもしれないし。」

「ありえない。だって誕生日に彼氏の名入りのカップ作るんだぞ。  
しかも五千円もすんだぞ。おまえ好きでもない女に五千円も使うか  
？」

「そりや使わんけど。でも、必ずしも二人の関係がハッピーとは限  
らんだろ。」

「そりやそうだけど・・・とにかく今度あつてコクルなんてできね  
えよ。」

「うーん、じゃあ、せめてもう一回会っ口実を作れ。」  
「どうやって？」

「うーん。ハンカチ借りたお礼にお茶でも奢るからとかなんとかい  
つてさ。」

「お礼？なんか変じゃない？」

「変じゃないよ。いきさつはともかく、ハンカチを借りたのは確か  
だし。お礼は変じゃない。」

「そっかなあ。まあ、いいや、試してみるよ。」

「いつ返すんだよ？」

「タベ洗濯したから。もう乾いてるだろうし。今日メールして明日にでも会えれば会っよ。」

「ふーん。」

「おい？なんか企んでない？」

「え？なにが？何いつてんの宙ちゃん。」

美樹生は、にやりと笑って宙の肩をポンッと叩いた。

「あやしい……。絶対何か企んでる。」

「めっそもない。さっ授業始まるよん！」

「……………」

宙は、放課後少しドキドキしながら絵羽にメールをしてみた。ほどなく返事が返ってきた。

《了解です。明日大丈夫だよ。時間も五時でOK！楽しみにしてるね。じゃ！（^ー^-） 弟へ姉より。》

「弟へ？姉より？なんじゃそりゃ？あははは、子ども扱いじゃん。」

隣で盗み見をしていた美樹生が笑った。

「うるせえな。言ったる、店で馬鹿にされたって。」

「聞いてたけど、おっかしいな絵羽ちゃんって。」

「なんだかなあ。やつぱ望み薄でしょ。弟扱いじゃ。」

「そうでもねえよ。ほら、女って精神年齢はやつぱ上じゃん。だから、逆に母性本能くすぐる感じでいったらいいかも。」

「母性本能？おまえ、勉強できねえくせにそういうことだけは言葉よく出てくんな。」

「ほっとけ！宙が心配だから言っつてやつてるんだろ。」

「わかったよ。じゃあ、とにかく明日会ってくる。で、お茶誘ってみるよ。」

「ほいほい。がんばれよ。じゃ、俺部活行くから。」

「おう、じゃあな。また明日。」

そのまま家に帰った宙は家の手伝いで仏具店の店番をしていた。

「よう、宙！」

部活帰りの美樹生が店に来た。

「なんだ、美樹生？なんか用？」

「ああ、えっと明日って、ほら、絵羽ちゃんと会つ。ショッピングモールのとこだよな？」

「え？そうだけど・・・やつぱ、なんか企んでるだろ？」

「いやいや、別に。ちよっと心配だったからさ。」

「なんだそれ？わけわからん。あ？まさか来る気じゃないだろな？」  
「いやいや、そんなことするわけないじゃん。でも、宙見せてくれるって言ったよな？」

「いや、やつは無理。別に彼女でもないんだから会わせるなんてできるわけないじゃん。」

「ふーん、そう。ま、いいや。じゃあ疲れたから帰るわ、俺。」

「なんだ？何しに来たんだおまえは？まあ、いいや、気をつけてな。」

「おう！じゃ明日。」

「明日！」

『明らかに美樹生は何か企んでいる。でも、美樹生とは幼稚園からの付き合いだから、あいつが悪い奴でないことはよくわかってる。中学の時も俺が好きになったコになかなかコクれないでいたら、美樹生が変わりに話をしてきてくれて、結局はふられたんだけどその後「ごめんな。」て何度も謝って一緒に泣いてくれた。気がいい奴だ。』

部屋に戻った宙は干してあるハンカチを手にとると、そっと匂いを嗅いだ。

「俺は何やってんだ。変態か・・・そうだ！」

「お袋！アイロンある？貸して！」

「アイロン、何すんの？ズボンにあてるならやってやるよ。」  
「いいよ。自分でやる。」

「ん？押入れの中だよ。やけどすんなよ。」  
「大丈夫だよ、ガキじゃねえんだから。」

「つたく、都合のいいときは大人にも子どもにもなるんだねえ。いいねえ高校生は。」

「うるさいなあ。とにかく借りるよ。」

「はいはい、使ったらちゃんとしまつとくんだよ。」

「はいはい。」

宙は小学校の家庭科以来アイロンを使った。

「こんな感じかな。おお、上出来。ピシツとしたな。これなら絵羽ちゃんも喜んでくれるかな。・・・って別に絵羽ちゃんのもの返すのに喜ぶわけないか・・・ははは。」

宙は、なぜか浮かれている自分がおかしくなった。

次の日、放課後になって絵羽と待ち合わせのショッピングモールに出かけた。今日は学校帰りなので制服のままだ。

約束の五時を少し回った頃

「よー！」

いきなり後ろから肩を叩かれた。

振り返ると制服姿の絵羽がニツコリと笑って立っていた。

「あーお、おっす！」

「いやあ！元気だった？って二日しか空いてないか。」

「うん、そうだよ。一昨日会ったじゃん。」

「だよー。で、ハンカチ持って来てくれた？」



「ああ、はい、これ、サンキュー。」

「わあ、なんかピシツとしてるね。アイロンあてた？」

「あ？ん、一応借りたもんだし、ちゃんとしないうって思っ  
て。」「プツ、やっぱかわいいね。宙って。」

「なんだよ。おかしいかよ。ちゃんとしようと思っただけじゃん。  
」」「なんだあ？怒った？ごめんね。ソ・ラ・ちゃん。」

「宙ちゃんはよせ。タメだろ。」

「ごめん、ごめん。怒らないですよ。」

「別に怒ってないよ。とにかく返したよ。」

「ありがとう。きちんと洗濯してくれて。」

「おう、じゃあ、俺帰るよ。」

「あ、ねえ、時間ある？」

「え？別に・・・あるけど。」

「ほんと？！じゃあさ、ちょっとお茶しない？」

「え？お茶？あ、うん、いいよ。」

「よし、決まった。じゃあ、そのスタバいこうか。」

「あ、うん。」

そういうと絵羽はさっさと歩き出し、後ろをついていくように宙も歩き出した。

本当は宙から「お茶」を申し出るはずだったが、絵羽と会って何もいえなくなっていたところ、好都合にも絵羽からお茶を誘って

れた。

それぞれ注文をすると窓際の二人がけの席に座った。ちょっと高めのカウンター席だったので、背の低い絵羽の足が地面につかずにプラプラと揺れていた。その姿が愛らしくて宙はちよつと自分の顔が熱くなっているのがわかった。

その気持ちをそらそうとふつと店内を見回すと、見慣れた感じの人間がこちらをチラチラと見ていた。

「美樹生……。あいつやっぱりきやがった。」

「ん？ なぁに、なんか言った？」

キョトンとした顔で絵羽が尋ねた。

「あ！ いや、何でもない、気にしないで。」

宙は、あたふたとしながらも冷静を装って返事をした。

「あのね。ちよつとだけ話聞いてくれる？」

「うん、なに？」

「あのね。宙って……。エッチしたことある？」

「ブッ」

飲んだコーヒーを噴出しそうになった。

「いやん。飛ばさないでよ。制服なんだから。」

「つて、無理言っなよ。いきなりそんなこと聞くんだもん。」

「あ？ 刺激強かった。つてことはまだまだよね。」

「え？ あ、うん。残念ながら。」

「だよねー、そっか、まあいいんだけど男の子ってさ、やっぱり好きだからエッチしたくなるの?」

「え? まあそうだろう。あ、いや、人によるかな。」

「人によるって?」

「んゝつまり、俺は好きな人とじゃなきゃだけど、男の中には誰とでもしちゃう奴もいるよ。」

「んゝ、そっか、そうだね。女でも誰とでもできるコいるもんね。」

「うん、たぶん。え? まさか彼氏とはまだ?」

「え? やだあ、いきなり聞くな。」

宙は、赤面してる絵羽を見て自分の胸が何か締め付けられる感覚を味わった。

「あのね。実は昨日彼氏の誕生日だったじゃん。」

「うん。」

「でね。彼の家まで行ったの。そうしたらご両親が留守で。」

両親が留守という言葉を聞いただけで宙は心臓がドキドキしたした。

「でね。彼の部屋は二階にあって、お茶とか入れてくれて、いつものように話しててプレゼント渡して、すっごく喜んでくれて。そうして……。あ、何話してんだろあたし。恥かしくなってきた。」

「なんだよ。そこまで言ってて。」

「ん、じゃあ、言っけどあまりこっち見ないで。ハズイから。」  
「わかったよ。」

そう言われて、ふっと視線をそらし、その隙に美樹生の動向を伺った。美樹生はあきらかにこっちを凝視している。

「で、ふと会話が止まって。その・・・キス・・・されたのね。」  
「う、うん。」

「あ、別にキスは初めてではなかったからいいんだけど。」  
『よくない。』心の中で宙はつぶやいた。

「で、いつもならそこで終わるんだけど。そのまま、彼があたしを押し倒してきたの。」  
「う、うん。」

返事をしながら宙の手は握りこぶしを作っていた。

「それで、その、エッチしたいって迫ってきて。でも、もちろん初めてだったから、それに、ほら、その、ゴム。コンドームもなかったし、やばいかなって思ってた。」

『じゃあ、コンドームがあればやってたんかい。』今度は心の中で叫んだ。

「で、まだ心の準備が出来てないって拒否っちゃたのね。」  
「うん。」

「そうしたら彼、急に不機嫌になって、『今日は帰ってくれ。』って言われちゃって・・・。」

絵羽の声のトーンが変わった。ふと見ると目に涙をいっぱい浮かべていた。そして、その大きな瞳から涙がこぼれた。

「絵羽・・・ちゃん。」

「あ、ごめん。ごめんね。なんか、エッチしなかったことが、あたしが彼氏を好きじゃないって思われたかと思って。」

「いや、絵羽ちゃんは正しいよ。そんなの彼氏の方がいけないと思う。うまく言えないけど、やっぱりエッチって男より女の子の方がリスクあるし、心の準備も、それと・・・避妊とかもちゃんと考えないと。」

「ありがとう。そう思ってくれるんだ。」

「うん。だって、そりゃやっぱ、ほんとに男が冷静に考えなきゃいけないことだと思うし。」

「・・・・・・・・・・。」

「あ、ん～うまく言えないけど、そういうのってお互いの気持ちが大事だし、片方が良くても片方が嫌だったらしちゃいけない気がする。」

「ありがとう宙、なんかスッキリした！聞いてもらっただけで気持ち晴れたよ。」

「ほんと？」

「うん、ほんと！なんか宙って弟みたいって思ったけど、やっぱり奴だね。男としても。」

『男として』その言葉で自分のポイントが上がった気がした。

「でね。実を言うと、最近彼氏とうまくいつてないんだよね。」

「え？エツチ拒否ったから？」

「いや、その前からちよつとずつずれてきたっていうか・・・わかるかな気持ちのずれのようなこと。」

「気持ちのずれ・・・うん、なんとなくわかる気がする。」

「彼氏はね。一コ上だから、受験なんだ。」

「あー先輩なんだ。大学受けるんだね。」

「うん、一応進学校だし、ほとんどの人は受けるんだけど、浪人も多いけどね。」

「ふーん、まあ一応うちも七割くらいは受けるかな。」

「宙は？大学受けるの？」

「え？あー、うん、たぶん、勉強は全然してないけど、ただ、ほら、うちっておふくろだけって言ったでしょ。だからこれ以上金銭的な負担は掛けられないかなって思ってるんだけどね。おふくろは大学くらい行かせる金はあるって言うんだけど。」

「そうなんだ？でね。彼氏ちよつと今回の受験では無理っぽいの、志望校は。」

「・・・・・・。」

「それもあってなんかイライラしてて、部活もサッカー部だったんだけど引退したせいか発散するところなくてストレスたまってるみたいで。」

「あーだろうね。今まで運動してたから急にやめるとストレス溜まるって言うし。」

「そうなの。だから、あたしにエッチ迫るのもそういうストレスのはけ口じゃないかって思っちゃうんだよね。」

「えーそれは酷くない？そういうのって愛情の問題じゃない。」

「愛情・・・つか、あるのかどうか正直わかんないんだよね。」

「なんで？絵羽ちゃんかわいいし、明るいし、言うことないじゃん。付き合ってた愛情がわからないわけないじゃん。」

宙は、そう言ってから自分が何を言ってるのか反芻して恥ずかしくなった。はんすう

「ありがとう。」

そう言って絵羽はにっこりと宙に微笑みかけた。宙は、その顔がたまらなくかわいいと思った。

「宙ってよくみると男前だよな。もてるんじゃない？」

「え？なんだよ急に。もてねえよ。彼女いない歴17年だからね。」

「マジで？そうは見えないなあ。性格に難があるとか？」

「酷くないそれって？」

「きやはは、うそうそ、性格だっていいじゃん。それはあたしが良く知ってる。」

「んーなんていうのかな。臆病なのかも。女の子の前だと堂々と出れないっていうか。」

「ふむ、そういうのって女から見ると頼りない感じだしね。」

「だろ？そういうところがもてないのかもな・・・。」

「へこんでる？」

「いや、別に、へこむというより、半分あきらめてる。」

「んー、でもさ、女も色々だから、そういう宙が“好き”っていう  
「も現れるよ。」

「そっかなあ、今のところ高校では望み薄だけど。」

「そうお？少なくともあたしはそういう宙が好きだよ。」  
「え？なにそれ？」

「あ・・・、んーと、トモダチとしてね。」

「あ、うん。トモダチとしてね。」

ほんの少しの間、沈黙が流れた。

「あ、そろそろいくね。晩御飯に遅れちゃう。うちも母親づるさい  
から。」

「あ、うん、俺も、帰る。」

「ありがとう。じゃ、ハンカチ持っていくね。」

「あ、うん。こっちこそありがとう。」

「じゃあね。」

「あ、うん。あ！絵羽・・・ちゃん。」

「なあに？」

「あの・・・また、会ってくれるかな？」

「え？あ、うん。いいよ。メールして。」

「うん！ありがとう。じゃ。いくね。」



そう言つと宙は絵羽より先に店を出ていった。

「おい！宙」

美樹生が追いかけてきた。

「どうだった？なんか最後笑顔だったじゃん。絵羽ちゃんも。」

「ふふふ、もう一度会う約束ゲットしたぜ！」

「マジで！やったな宙、うれしいよ。俺は幼馴染として。」

そういつて美樹生は腕で涙を拭くマネをした。

「ふざけてんじゃねえよ。でも、よかったあ。また、絵羽ちゃんと会える！」

「良かったなあ、宙。くっそーうらやましいぜ。ほんと宙が言った通り、かわいいな、絵羽ちゃんて。俺も惚れそう。」

「おい、俺が目をつけたんだからな。美樹生は邪魔すんなよ。」

「えへへ、恋は自由さ、俺と会ったら絵羽ちゃんが俺のほうに氣を向けるかも。」

「美樹生！」

そういつて美樹生の首に手を回し絞めるマネをした。

「あははは、かんべん、かんべん、おまえの幸せをぶち壊すわけないだろ。おまえの幸せは俺の幸せだからなあ。」

「ほんとかよ？まあ、いいや。とにかくこれからだ。」

「そうそう、これからだ。せいぜい振られないように気をつけてな。」

「美樹生、おまえ俺の幸せ願ってるなんて嘘だろ？」

「ばれた？」

「この野郎！」

「あはははは。」

帰りのなだらかな坂道を追い駆けっこをしながら帰る二人を丸く大きな月が見ていた。

それから、日に何度か宙は絵羽とメールのやり取りをするようになった。お互いの学校のことや家のことなどありふれた日常のことが主だったが、本当は宙にとって一番聞きたかったのは彼氏のことだった。

家に帰って夕食を済ませた頃、思い切って絵羽に彼氏のことをメールしてみた。

《話変わるけど、その後どう？彼氏とは？》

ほどなく返信が返ってきた。

《ビミョウ。あれから校内で会ってもなんかよそよしくて（  
ー・ー・ー）》

その返信にかわいそうと思いながら片方でガッツポーズをとっている自分がいた。

《そうなんだ。でも、はつきりさせなくていいの？》

《うん。それはそうなんだけど、なんかメールとかでするのもなんだし、会ってちゃんと話したいんだけど。なんかチャンス逃しちゃって。》

《とりあえずメールでアポ取って話す日を決めるとか。》

《そうだよな。それが一番いいかな。うん。そうしてみる。ありがとうね。宙》

《いや、お礼言われるのも変だけど。がんばって！俺が応援してるから！（^^）！》

《ありがとう。んじゃ、メールしてみるね。また連絡する。おやすみ！》

そういつて絵羽からのメールが途切れた。

その日はなんだか遅くまで眠れなかった。ふと外をみると絵羽と出会った日と同じように霧が立ち込めていた。

### 第3話：恋

翌日の朝、絵羽からメールが入っていた。

《今日、会えるかな？》

思わぬ絵羽からの誘いにちょっと戸惑ったが、宙はOKの返事を出した。

放課後待ち合わせの場所にいくとすでに絵羽が来ていた。  
いつもの調子で後姿の絵羽に

「よー！」

と声をかけポンツと肩を叩くと振り返った絵羽は目にいっぱい  
の涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの？」

「・・・別れちゃった。」

「え？彼氏と？」

「うん・・・。」

「どうして？」

「勉強が・・・忙しいからだって。」

「はあ！なんだそりゃ？絵羽ちゃんより勉強の方が大事だっていう  
のかよ！」

「仕方・・・ないよ。受験生だもん。」

「冗談じゃない！俺だったら彼女の方を大事にするぜ！」

「しょうがないよ。受験は一生のことだから。」

「でも……。」

「ありがとう。もう、いいの。宙が怒ってくれただけで、私の気持ちも晴れたから。」

そういつて絵羽は涙を浮かべた目でむりやりにっこりと笑った。

「絵羽……。」

「あ！はじめて呼び捨てしたな。宙。」

「え？ああ、いや、なんとなく……ごめん。」

「いいよ。呼び捨てして。あたしだって初めから呼び捨てだし。トモダチでしょ。」

「あ、うん。絵羽。トモダチだもんな。」

「うん！」

そういつと絵羽はそつと宙の手に自分の手を重ねてきた。

「少し歩こう！」

引つ張られるように宙は絵羽と手を繋ぎながら歩いた。絵羽の小さく柔らかな手が、自分の手に重なっている。宙は、そう思うとそこだけすべての神経が集中したような感覚がして、全身から力が抜けていく気がした。

「ねえ、あたしたち周りから見たらどう見えるかな？」

「え？」

「姉弟？それとも・・・彼氏と彼女？」

「え？そりゃ、彼氏と彼女だろ。恋人って見られてるよ。きっと。」

「そっかなあ。あたしはきつとお姉さんが弟の手を引いてるって見られてると思うよ。」

「ちえ、いいよ。それでも。」

「きやはは、かわいい、宙。それでもいいんだ？」

「ああ、絵羽と手を繋いでるだけで・・・幸せだもん。」

「え？・・・ばか。」

「なんだよ。照れてんの？手を繋ぎだしたのは絵羽のほうだぜ。」

「わかってるよ。ばか。急にそんなこと言うから・・・ハズイじゃん。」

「へえー絵羽でも照れるんだ。」

「ばか！知らない！もう、手、繋がらないから。」

そう言って繋いでいた手を絵羽がふりほどこうとすると、宙はその手にグツと力を入れて、絵羽を引き寄せ、ビルの隙間に引き込んだ。勢いよく引かれた絵羽はそのまま宙の腕の中へ引き込まれた。

「宙？」

絵羽が何かを言おうとしたのを遮るように宙は絵羽の身体をグツと引き寄せてキスをした。

驚いた絵羽は一瞬手に力を込めて宙の身体を引き離そうとしたが、重ねられた唇から力が抜けていき、そのまま今度は宙の身体に強く抱きつくように自ら力を入れた。

ほんの数秒のことだったが、二人には5分にも10分にも感じられた。

抱き合ったまま唇を離し、見詰め合った二人に言葉はいらなかった。

しばらくして、最初に言葉を発したのは、宙だった。

「絵羽、好きだよ。一目惚れだった。」

「うそ、最初は怒ってたよ。自転車でひっくり返って腕擦りむいて。」

「ああ、でも、その日の夜には惚れてた。」

「ほんと？同情とかじゃ・・・ないよね？」

「当たり前だろ。ばか。俺は男として女のおまえが好きになったんだ。」

「ほんとだね。あたしも宙と出会ったとき、こんな風になるような予感がしてた。」

「ほんと？」

「最初はあったまくる奴だったけどね。クスッ。」

「ちえ、やっぱ怒ってたもん絵羽。」

「そりゃ、そうでしょ。あんな出会い方だもん。でもね。ハンカチ貸した後、家に帰ってから、何で見ず知らずのそれも喧嘩したような奴にハンカチ貸したんだろうって考えたんだ。」

「うん。」

「それで、なんかちょっと運命みたいなものを感じた。」

「運命？」

「うん、あの霧の中で魔法にかかったみたいな。」

「そういえば、すっごい深い霧だったよな。」

「そう。その霧があたしと宙を引き合わせたんだって。そんな風に考えてた。」

「俺も、帰ってから霧の空を見つめながら絵羽のこと考えてた。」  
「通じてたんだね。あたしたち。」

「そうかもな。」

「クスッ」

「あはは。」

ビルの隙間で微笑み会う二人には都会の雑踏が別の世界に感じていた。

二人はそれから、毎日放課後には会っていた。散歩をしたり、お茶したり、お金はなかったが、それでも、休みの日は少し奮発してお互いのバイト代を出し合って遊園地にいったり、映画を見たりもした。ごく普通の高校生カップルと同じように二人の時間を楽しんでいた。

その日も学校の帰りに待ち合わせた二人はファーストフードの店に入って軽い食事をとっていた。

「絵羽、はい、これ。」

宙は小さな包みを絵羽に渡した。

「ん？なあに？」

「開けてみて。」



「うん。あ！指環！どうしたの？」

「今日は何の日か知ってる？」

「え？今日？何の日？私の誕生日ではないし、宙のとも違うし……」

「なんで自分の誕生日に指輪あげるの？」

「だってえ……、あ！もしかして、私たちが初めて会って……」

「そう、あの自転車事故から一ヶ月、つまり、二人が出会って一ヶ月の記念。」

「わあ、ありがとう、宙、そんなこと覚えててくれたんだ。」

「まあね。強烈な出会いでしたからね。」

「もう、言わないで。怒鳴ったりして、少しは後悔してるんだから。」

「ははは、いいよ。そのおかげでこうしていられるんだから。」

「そっか、そうだね。でも、これ高かったんじゃない？」

「ううん、正直値段はいえなくらい安い。でも、バイト代、一応つぎ込んだから。」

「ありがとう、宙、大好き！でも、無理しないでね。」

「その言葉だけで、報われた！でもなあ、もっとお金があればなあ。旅行とか行きたいよね。」

「旅行かあ。行きたいな。」

「だなあ。温泉とか。」

「きゃはは、宙、じじくさーい。」

「なんでだよ。最高の贅沢じゃん。温泉に浸かって、ノンビリして日頃の疲れを癒すんだよ。」

「日頃の疲れって、おっさんみたい。そもそもなんか疲れるようなことしてる？」

「ばーか、俺は人一倍気を遣うんだよ。だから、絵羽と違って疲れるの。」

「なーに、それ、まるであたしが気を遣ってないみたいじゃない。」  
「え？遣ってたの？それは知らなかった。」

「ひつどーい、もう知らない。宙のばか！」

「あははは、いつもやられっぱなしだからね。お返しだよ。」

「べーだ！宙と旅行なんていかなーい。」

「いいよ。べつにー、他の誰か誘っていっちゃんおうかなあ。」

「ばかあー！」

そう言った絵羽が宙の顔面にパンチを繰り出す振りをしたとき、バランスを崩したようになり、椅子から滑り落ちた。

「あははは、なにやってんの、絵羽？だっせー。」

「……………」

「ほら、ハズイから早く立てよ。」

「……………」

「絵羽、ふざけてないで、死んだ振りとかしてんなよ。」

椅子から滑り落ちた絵羽はそのままの体勢で動かない。

「絵羽？おい！どうした？絵羽？」

ふざけているのではないことを察知した宙が、絵羽の身体を抱き寄せたが、絵羽の身体にはまったく力が入らず、動かない。

「絵羽？おい、しっかりしろ。誰か！救急車呼んでください。誰か！」

しばらくして店員が救急車を手配して、絵羽は病院まで搬送された。付き添った宙は絵羽の手をずっと握っていたが、どんどん冷たくなる絵羽の手を握りながらずっと震えていた。

「ご家族の方ですか？」

到着した病院の看護師に尋ねられた。

「いえ、恋人です。」

「ご家族の連絡先はわかりますか？」

「はい、自宅の電話なら。」

「すぐに親御さんをお呼びください。」

「はい！」

そう返事はしたものの、正直どうなっているのか頭の整理がつかなかった。『親を呼ぶ？そんなに悪いのか？一体なんなんだ？まさ

か……。』

とにかく自分を取り乱してはダメだと思い直し、絵羽の自宅に連絡を入れた。

母親が出たので、事情を説明していると、慌てた様子で「すぐに行きます。」と告げられ電話を切られた。

三十分後、絵羽の母親が病院に着いた。

「あなたが、宙さん?! 絵羽から話は聞いてます。絵羽は? いったいどうしたの?!」

慌てた母親が宙に掴みかかる勢いで聞いてきた。

答えに窮していると、奥の廊下から医師が歩いてきた。

「お母様ですか? 石田と申します。とにかくこちらまでおいでください。」

一緒についていこうとした宙を看護師が止めた。

「ごめんね。君はここで待っていてください。」

そう言われて、動くことが出来なくなった。医師に連れられていく絵羽の母親を呆然と見送った。

しばらくして母親が出てきた。その表情は青ざめていて、力なく歩いてきた。

「お母さん。どうなんです? 絵羽は? 絵羽はどうしたんです。」

絵羽の母親を呼びとめ、問いかけるが全く答えを返してはくれない。

「お母さん。どうしたんです。教えてください。絵羽は大丈夫なんですか？」

そう声を掛けた瞬間、母親はうなだれ、その場に座り込んでしまった。

宙は、座り込んで気力をなくしている絵羽の母親の肩をゆすりながらもう一度同じ質問をぶつけた。

「・・・病。」

「え？今なんて？なんの？なんの病気なんですか？」

「白血病・・・。」

『ハツケツビヨウ』確かにそう聞こえた。耳を疑った宙はもう一度母親に尋ねた。

しかし、それ以上母親は何も言葉を発することなく、その場に突っ伏して泣き出した。

しばらくして先ほどの医師が戻ってきた。

「君は？彼女の友達かね？」

「はい、恋人です。付き合ってます。」

「そうか、じゃあ、君にもしつかり聞いてもらった方がいいね。いいかい。彼女は急性骨髄性白血病だ。それもかなり悪性の。血液の癌なんだ。助かるには今すぐにでも骨髄移植をするしかない。」

「僕の、僕の骨髄を使ってください。いくらでもいくらでも使ってください。」

そついう宙に医師は力なく首を横に振った。

「誰の骨髄でもいいわけではないんだ。血液型やその人に合った骨髄でなければ意味がないんだ。その確率は約十万人に一人。親でさえ合わない方が多いんだよ。」

「そんな・・・、どうすれば、どうすれば絵羽は助かるんですか？」

「すでに、ドナー、つまり骨髄が適合した人が登録をされているか、問い合わせをしているが、それまでに彼女の身体がもてばの話だが。」

「いつまで、どれくらい待てばいいんですか？絵羽の身体はいつまでもつんですか？」

「はつきりとはわからない。一月先か、一週間先か、明日かもしれない。」

「そんな、あんた医者だろ？医者がそんないい加減でいいのかよ！」

そんなことを言っても無理なことは頭ではわかっていたが、やり場のない怒りを医師にぶつけた。

「これはどんな名医でもドナーがいなければ無理なんだよ。」

冷静に医師は答えた。

「ちくしょう！なんで、絵羽が・・・俺が、俺が替わってやりたい！ちくしょう！」

溢れてくる涙で目の前が滲んできた。床を思いっきり叩く。

「今は運を天に任せるしかない。」

そう言われて、しばらくは黙っていた宙は冷静さを取り戻した。

「絵羽に会えますか？」

「今は無理だ。集中治療室にいる。治療を続けているので会うことはできない。」

「ひと目、ひと目だけでいいんです。絵羽の顔が見たいんです。」

宙の必死な形相に押された医師はガラス越しならという条件で絵羽に会わせてくれた。

「絵羽……。」

たくさんの機械に囲まれて、透明な覆いに囲われた絵羽がそこにいた。

「絵羽……俺の声が聞こえるか？返事してくれよ。絵羽……。」

力なく話しかけるが、ガラス越しに聞こえてくるのは中で作動している機械の音だけだった。

#### 第4話：闘い

途方にくれながら帰途に着いた宙は自分がどの道をどうやって家までたどり着いたのか全くわからなかった。

「お帰り、遅かったね。おデートは楽しかったかい？楽しいことのあとはしっかり勉強もしてもらわないとね。」

母親の皮肉にも全く応える気力がなかった。

「おい！宙？どうしたんだい。まさかもう振られた？やっと付き合いえたってまだ、一ヶ月しか経ってないじゃない。しょうがないね。何したのさ？」

「お袋、骨髓調べさせてくれないか？」

「はあ？何言ってるんだい？しっかりしなよ。大丈夫かい？なんだい、骨髓って？」

ひとしきりしゃべっていた母親の話が途切れたところで事情を話し出した。

母親は事の重大さに気づき黙ってしまった。

「お願いだ。お袋、骨髓を調べさせてくれ。」

「わかった。明日病院に行くよ。あんたの彼女ならあたしの娘になるかもしれないんだから、他人じゃないからね。」

「お袋・・・ありがとう。」

そういつて泣き出す宙の頭を軽く小突いた母親は



「あんたがすっかりしなくてどうするんだよ。あんたの彼女だろ。すっかりしな。」

「うん。ありがとう。お袋。ありがとう。」

翌日宙は母親を伴って自分と母親のドナー登録をするために病院に向った。

病院では昨日の石田という医師が対応してくれた。

「髄液を調べますので、ちょっと苦痛が伴います。よろしいですか？」

「もちろんです。早くお願いします。」

母親も隣で頷いた。

背骨から注射針で髄液を抜かれるのは相当な痛みを伴う。人によつてはそれが元でしばらく歩けなくなることもあるほどだが、宙は絵羽の辛さを思えばどんな痛みにも耐えられると思った。

待合室で待っていると石田が現れた。

「先生！どうなんです？俺のか、お袋のか適合しましたか？」

石田はゆつくりと首を横に振った。

「だめなんですか？どうして？お袋のも？」

再び首を横に振った石田は

「前にも言ったとおり本当に確率は低い。ドナー登録者の中でも探している。絵羽さんのご両親、弟さんのも調べたが適合しなかった。」

「絵羽……。」

そついうと宙はその場に座り込んでしまった。

「こら、宙！あんたが力を失ってどうするんだよ。男ならしっかりしな！」

母親に叱咤しったされて、なんとか気力を出し立ち上がった。

「先生、絵羽を助ける方法は他にないんですか？待っただけなんですか？」

「もう一つ方法はある。臍さい帯血輸血たいけつといって赤ん坊のへその緒から採られた血液が白血病の治療に有効だということがわかっている。ただ、根本的に治すことができるとは限らない。ただ延命するだけになるかもしれない。とにかくそれでも試してはみるつもりだ。今、各産婦人科にあたっている。」

「お願いします。一日でも長く、絵羽を生きさせてください。お願いします。」

必死で頼み込む宙の肩を抱きながら石田は頷いた。

二日後病院から連絡があり、臍帯血輸血がうまくいったとの知らせが届いた。

絵羽の意識が戻り面会が出来る状態になったというので、とるものもとりにあえず宙は病院に向った。

病院では石田が待っていた。そして、絵羽の病室に案内してくれた。

「絵羽……。」

部屋に入るとまだ色々な機械に囲まれてはいるが、目を開いた絵羽がそこにいた。

「宙……、ごめんね。こんなことになって。」

弱々しい声で絵羽が言葉を発した。

「なんでおまえが謝るんだよ。何もしてやれないのは俺なのに。」

「うっん。お母さんから聞いた。宙も、宙のお母さんもあたしのために痛い思いしてくれたんでしょ。」

「絵羽の辛さに比べたらたいしたことないよ。それにうちのお袋は困ってる人みるといてもたってもいられないたちだから。」

「ありがとう。大丈夫だよ。あたし、絶対治してみせるから。」

「当たり前だよ。まだ、俺たちすることいっぱいあるだろ。旅行だつて行かなきゃ。」

「そうだよ。宙と温泉行くんだもんね。」

「あ、すみません。そういう話していたもんですから。」

傍に母親がいたので旅行の話はちよつとまずいと思って気を遣ったが、絵羽の母親はにっこりと笑って『いいんですよ。』と言うように頷いた。

「早く退院したいな。もうすぐ夏になるし、あたし夏が好きなの。季節の中で一番好き。」

「俺も、ほら俺の誕生日夏だから。真夏だからさ。」

「そうだよな。宙の誕生日一緒に祝わないとね。」

「そうだよ。絵羽がいてくれなきゃ折角の誕生日が台無しだよ。」

「わかってる。それまでには絶対退院するから。」

「約束だぞ。俺の誕生日は一緒にいること。」

「うん。約束する。一緒にいる。」

「きつとだよ。夏休みだからな、旅行の予約とっておくからな。」

「うん、それまでに治してみせるよ。」

「うん。がんばれよ。」

それから毎日、宙は絵羽の病室を訪れて、面会時間が終わる午後七時まで絵羽と一緒に過ごした。

時には疲れから絵羽が眠ってしまっても、ずっと傍でその寝顔を見つめていた。

二週間目から放射線の治療や抗がん剤を投与したため、絵羽の栗毛色の美しい髪は次第に抜け落ちていった。

「なんかハズイな。髪の毛がなくなっていくの见られるの。」

「何言っただよ。治療のためだろ。副作用が強いつてことは効いてる証拠でもあるんだから。俺はおまえの見た目だけに惚れたんじゃないんだから。気にするな。」

「うん。ありがと。でも、やっぱり女としてはちょっとね。」  
「・・・そっか。あつ、待ってる。」

そういつと宙は病室を出て行った。

三十分後、宙が小脇に荷物を抱えて帰ってきた。

「何？」

「ほら。これ。」

「あ、帽子、ニットキャップだね。ありがと。」

「うん、ちょっと暑いかもしれないけど・・・絵羽に似合う色だと思つて白にしたよ。」

「かわいい。このアクセントのウサギかな？これかわいいよ。宙いいセンスしてるね。」

「ほんと？喜んでもらえて嬉しいよ。被ってみて。」

「うん。」

そういつて被ったニットキャップはちょうど絵羽の頭をすっぽりと覆つて、眉の上辺りで止まった。

「似合う！マジかわいい！惚れ直した。」

「もう、うまいこと言つて。ほんと？」

「うん、マジだよ。ほら。」

そう言つて近くにあつた手鏡を絵羽に見せた。

「ほんとだ。かわいい！自分でも似合ってるって思う。」

「だろ。絵羽はなに被ってもかわいいから大丈夫だと思ったんだ。」

「なあに。気味悪い。今までおまえの顔は派手だからとか、いいこと言わなかったくせに。」

「照れ隠しだよ。ほんととは見た目にも惚れてたから。絵羽のかわいい顔に一目惚れした。」

「えー、調子いいの。さっき見た目に惚れたんじゃないって言ったじゃん。」

「良く聞いてなかったろ。見た目だけに惚れたんじゃないって言ったんだよ。」

「ずるーい！でも、いつか、見た目にも惚れてもらえた方がうれしい。」

「だろ。」

「きゃはは、だね。」

「絵羽……。」

「ん……。」

そつと絵羽を抱き寄せた宙は、優しくキスをしようとした。絵羽もその求めに応じた。

暮れ行く日差しが二人の顔を照らしていた。

絵羽の入院も三週間目に入った。絵羽の治療成績はよく、病室か

ら出て一人で院内を歩けるまでになっていた。そして、その週の終わりに医師から初めて外泊許可が出た。

その連絡を受けた宙は病院まで急いで出向いた。

「絵羽、よかった。外泊できるんだね。」

「うん。ありがとう。宙のおかげだよ。」

「なに言ってるんだよ。絵羽が頑張ったからじゃないか。」

「ううん。実はね。先生が言ってたんだけど、治療の効果が出てるのは宙のおかげだって。」

「え？どういうこと？」

「うんとね。こういう病気の場合、治療の効果の良し悪しは患者の精神状態にすごく反映されるんだって。」

「……。」

「つまり、患者に生きる気力があるかないかで全然違うらしいの。あたしの場合は宙と会いたい。もう一度デートしたい。温泉行きたい。って思ってたから、それが治療効果にも結びついたんだって。」

「え？先生に俺と温泉行きたいと言ったの？」

「言ったよ。まずかった？」

「いや、まずくはないけど……一応高校生だし、それって……。」

「あははは、そんなの気にしてるの？おっかしい。いいじゃん、高校生が旅行しちゃいけないの？」

「いや、その……。」

「きやはは、照れてるの？」

「ん、なんか恥ずかしくて、先生に会えないよ。」

「大丈夫だよ。それが結果としてよかったんだから。先生もいいことだって言ってくれたよ。」

「そつか、とにかく、まだ外泊許可が出ただけなんだから。無理すんなよ。」

「わかってる。今日はおうちでゆっくりするよ。」

「そうだな。送ってくから。」

「ありがとう。お願いね。」

そう言つて絵羽の身体を支えて宙は思った。やけに軽くなったと無理もなかった。入院から三週間で絵羽の体重は9キロ近く痩せてしまっていた。

元々大きな目をしていた絵羽の目は痩せてくぼんだようになったためさらに大きく見えた。

絵羽の家まで送った帰り道、偶然美樹生と出会った。

「宙！どうだ絵羽ちゃんの容態は？」

「おう、美樹生、偶然だな。大丈夫、今日外泊許可が出て、今家まで送ってきたとこだよ。」

「ほんとか？！よかったな宙！じゃあ、退院も近いのか？」

「ん？それはわからない。外泊許可と言っても一泊二日だから、明後日からまた病院に戻るし、治療もまだ続くだろう。」



「そうなんだ・・・でも、大丈夫だよ！きつとよくなるって。」

「うん、俺が看病してるんだから絶対治して見せるさ。」

「そうそう、毎日病院行ってるんだってな。お袋さんから聞いたよ。おまえがこれほど一つのこと集中したのは初めてだって。」

「お袋が・・・また余計なこと言うて。」

「あははは、でも、お袋さん感心してたよ。おまえがこれほど人のことを大切にするなんて見直したって。」

「なんだかなあ。そりゃ大切な恋人だぜ。当然だろ。」

「うん、そうは思うけど、普通自分のことをつい優先しちゃうじゃん、人間って。いくら惚れた相手が入院してるからって、毎日行けないぜ。休みの日なんて朝から行ってるんだろ？」

「うん、一時でも長く絵羽と一緒にいたいんだ。」

「だよな。俺でもそうすると思う。でも、おまえも身体気をつけろよ。無理しないように。」

「今無理しなきゃいつするって感じだよ。大丈夫、俺は氣力が充実してるから。」

「そつか、ならいいけど。俺ができることがあればいつでも連絡してこいよ。」

「ありがと。でも、おまえも最後の夏の県大会近いんだろ。頑張れよ。甲子園は無理としても、去年よりいいベストエイトくらいは狙えそうだしな。」

「ああ、頑張るよ。ほんとに優勝して甲子園といきたいところだけど、去年よりは絶対上げて見せるぜ。」

「おう！期待してる！もし甲子園なら絶対応援行くから。」

「そうだな。絵羽ちゃんと二人で来てくれよ。」

「ああ、絵羽を連れて甲子園か、悪くないな。」

「じゃあ、俺練習あるからいくな。」

「おう、休み返上で練習お疲れ！」

「甲子園が待ってるからな。」

そういつて美樹生は走っていった。見送りながら宙は本当に甲子園に絵羽と行っている自分を想像していた。

再び絵羽の入院生活が始まった。この治療が進めばもう少し長く外泊できる。場合によっては仮退院をすることもできる。しかし、今まで以上に苦痛を伴い、髪の毛も完全に抜け落ちて益々痩せていくことは確実だった。

トイレにいった絵羽は鏡を見て自分がどんどんやせ衰えて、醜くなっていくことに不安を感じていた。

それでも、毎日見舞いに来てくれる宙のことを考えて、なんとか頑張ろうと気力を振り絞っていた。

「絵羽ちゃん、今日からの治療は今まで以上に苦痛を伴うけど、大丈夫かな。」

「はい、先生、治してもらえるなら。もう一度外に出て、学校にも行けるなら。頑張ります。」

「そうだね。その気持ちが大事だよ。宙君も待ってるしね。」  
「はい、先生、お願いします。」

そして、治療が始まった。抗がん剤の副作用は想像以上にきつい、食べているものはすべて吐いてしまっし、眠ろうと思っても眠れない。さらに放射線治療は照射した部分がやけどのようになり、痛みを伴う。鎮痛剤は使うが、それが切れると泣きたくなくなるほど痛い。しかし、絵羽はもう一度宙と手を繋いでデートすることを夢見て、それを糧<sup>かて</sup>にして治療に耐えた。

そして、今日も宙が病室まで見舞いにやってきた。

「大丈夫、絵羽？今日の治療は辛かったみたいだし・・・。」  
「大丈夫！いつもね、痛みや辛い時には宙のこと考えてるの。そうすると自然と痛みや苦痛が消えていくの。」

「絵羽・・・。」

そういうと、痩せて一層細くなった絵羽の手を握りその指に自分の指を絡ませて、そっとキスをした。

「宙、絶対治してみせるね。そして、夏休みには旅行に行こうね。」  
「ああ、もちろんだよ。それまでに絶対治るさ。そうだ、美樹生が今年は甲子園も狙えるかもって。そしたら、二人で甲子園に美樹生の応援に行こうな。」

「ほんと！すごい！美樹生君がんばってるんだね。私も頑張って治して宙と一緒に甲子園行きたい！」

「そうそう、そのついでに旅行しよう。楽しみだな。」

「うん、すっごい楽しみ！ますます頑張る気になってきた。」

「そうだな、俺も毎日絵羽に会いに来るから、一緒にがんばろうな。」

「ありがとう。学校、そろそろ試験だね。大丈夫？」

「ん？当たり前だろ。ちゃんと授業はバッチリ聞いてるから大丈夫だつて。」

「ほんとかな？留年なんかしないでよ。あたしだけ卒業じゃ洒落しゃれにならないぞ。」

「馬鹿言つてんなよ。ちゃんと家にいれば勉強してるから。一緒に卒業するよ。」

「うん、それに受験もがんばろうね。あたしも夏から頑張るから。」

「うん、一緒に大学生になろうな。」

宙は、そういいながら、本当は絵羽のことで全く勉強は手につかず、担任から留年と脅されていることは絵羽には言えなかった。

「じゃあ、そろそろ時間だから、帰って勉強するよ。」

「うん、今日もありがとう。」

「うん、じゃあ。」

「あつ、宙……。」

そういつて宙を呼び止めた絵羽は甘えるようにキスをねだる仕草をした。

「絵羽……。」

そんな絵羽の姿が愛おしくて心の中に何か熱いものがこみ上げて

きた宙は、絵羽の一層細くなった肩をそつと抱いて、先ほどよりさらに優しくキスを交わした。

『ヤバイな・・・ほんとに今度の試験で赤点あったら留年になるのかな。三隅みすみ(担任)はそう言っつて脅おそしたけど・・・』

宙はかなり焦っつてはいたが、一番大切なものは何かと考えると絵羽以外には思いつかない。勉強や受験も本当は一生懸命しなければならぬことは頭ではわかっていたが、気持ちがどうしても行動を起こせなかった。

絵羽は今一生懸命病氣と闘っている。受験勉強だつてしたくてもできない。だから、俺も今は勉強をしないで絵羽が治いつたら一緒に勉強を始めて、一緒に受験して、一緒に大学に行く。言い訳にも聞こえるが、宙にとっては何よりも『絵羽と一緒に』ということが一番大事だった。

「はあ、やっぱり勉強は無理だ。絵羽と一緒にじゃなきゃだめだ。」

そう言っつてため息をついた。ふと窓の外を見ると霧が立ち込めていた。

霧を見ると、それはそのまま絵羽との出会いの時に記憶を遡さかのぼらせる。

宙が霧の外をボーッと眺めながら、絵羽とのことを考えていた時だった。

「ちょっと！宙！すぐ降りてらっしゃい！」

母親が大声で呼ぶ声がして、うつろになっつていたところだった宙はビクッと身体を起こした。

「なんだよ！こんな時間に大声出すなよ。近所迷惑だろ。」

そう言いながら階段を下りて行くと母親がこわばった顔で電話の子機を持っていてそれを宙に差し出した。

「なに？電話？誰から？」

「・・・。」

母親は、その問いに答えることなく、ピンと伸ばした子機を持つ手を宙の前に突き出したままだった。

「なんだよ。ったく・・・。」

そういいながら、母親を一瞥<sup>いちへつ</sup>すると受話器を受け取った。

「はい、江口です。え？・・・なんですって？！ちょっと、お母さん！もつとちゃんと話してください！お母さん！！とにかく、今すぐ行きます！待っててください！」

電話の相手は絵羽の母親だった。電話口で泣きながら言われたのは、絵羽が危篤状態だということだった。それ以上は相手も取り乱していて全く話にならなかった。

電話を切った宙は二階に上がり、上着だけ羽織った状態で玄関に向かった。

「お袋・・・。」

玄関先に母親が仁王立ちしていた。

「いいかい、宙、あんたがしっかりしなきゃダメなんだよ。」

急ぎ焦っている宙にわざとゆっくり噛み砕くように母親は言った。  
その目は宙の目をまっすぐに見据えていた。

「わかった。大丈夫だよ俺は。」

母親が言葉以上に伝えたかったことを理解した宙はそう言い返す  
としつかりと靴ヒモを締めなおして玄関を出て行った。

宙の乗った自転車は猛スピードで夜の街を駆けた。母親の言葉で  
気持ちは落ち着いていたが、急がずにはいられなかった。

## 第5話：旅立ち

病院の駐輪場にタイヤを鳴らすようにすべりこんだ宙は、自転車を倒したのも気に留めず走って病院の通用口へ向った。

絵羽の病室に向かいそのドアを開け放つ。そこには多くの機械に取り囲まれながら絵羽が激しく呼吸をしている姿が目飛び込んできた。

「絵羽！」

駆け寄ろうとすると、看護師に制止された。

「今、最善を尽くしています。とにかく落ち着いてそこで患者の回復を祈ってください。」

そう諭<sup>さと</sup>されると、宙は、そこから一步も動けなくなった。

傍らには絵羽の母親が祈るように手を組んで震えながら絵羽の名前を呼び続けていた。

「絵羽……。」

そうついいながら、少しずつ絵羽の横たわるベッドに近づいた。そして、母親の声を打ち消すくらい大きな声で叫んだ。

「絵羽！がんばれ！こんなことで負けんな！絵羽、俺が来たからもう大丈夫だ！俺のほうを見てくれ！絵羽！」

その声が絵羽の耳に届いたのか、絵羽の身体は一瞬大きな呼吸をした後、グツタリとして、宙たちを驚かせたが、すぐに身体をピク



りと動かし、そつと目を開いた。

「絵羽！」

そういうが早いか、ベッドに駆け寄った宙は、看護師や石田医師を押しつけて絵羽の手を握っていた。

「絵羽……。」

「宙……。」

見詰め合った二人を誰も引き離すことはできなかった。

「絵羽、一緒に旅行行くんだろ。頑張れるよな。」

「宙……、当たり前……でしょ。甲子園も……ね。」

いき絶え絶えに絵羽が応えた。

「そうだよ。美樹生、もう、四回戦まで行ったよ。次、勝てばベストエイトだから。」

「すごい……ね。美樹生……君。頑張ってるんだ。」

「そうだよ。俺と絵羽を甲子園に招待するって、約束してくれたから……、一緒に行こうな甲子園も。」

「うん……、宙と一緒に甲子園に行って、その後、旅行に行くんだよ……ね。」

「そうだよ。もうすぐ夏休みなんだから、それまでに絵羽は病気に勝つんだよ。」

フツと絵羽が微笑んで、頷いた。そして、ゆっくりと窓の外を見

つめた。

「霧・・・、宙と出会ったのもこんな霧の日だったよね。」

「ああ、そうだな。俺が自転車ぶつけそうになって、絵羽の彼氏のマグカップ壊して。」

「うふふふ、彼氏かぁ・・・、今じゃその宙が彼氏・・・だもんね。」

そういつとまた絵羽は宙を見つめて力なく微笑んだ。

「そうだよ。俺は絵羽の彼氏さ。世界に一人だけ絵羽を愛してるって堂々と言える彼氏だよ。」

「ばか・・・、ハズイよ。でも、ありがとう。あたし・・・幸せだよ。」

「絵羽・・・、もっともつと幸せにするから・・・、だから・・・。」

そういつと宙の瞳から止め処もなく涙が溢れてきた。

「やだぁ、宙・・・、泣いてるの？だめだよ。みんなの前でハズイよ。」

「うん・・・、でも、止まらない。いいんだ。絵羽の前で泣くの、初めてだろ。」

「そうだね・・・、泣いてる宙もかわいい。」

三度<sup>みたひ</sup>絵羽は微笑んだ。

「ばかに・・・すんなよ。愛する人の前だから、涙を見せてるんだぞ。」

「うん、ありがとう。宙・・・。」

「絵羽・・・。」

再び二人は見詰め合った。その二人の間だけ時間が止まっているようだった。

「宙・・・、少し眠い。」

「うん、ゆっくりおやすみ、明日また来るから。」

「ありがとう。少し眠るね。試験勉強もがんばって・・・。」

「余計な心配すんな。今は自分の身体のことだけ考えればいいから。」

「うん・・・、ありがとう。幸せだったよ。宙。」

「幸せだったじゃ、ないだろ。『幸せだよ。』だろ。」

「あつ、今そういった？変だな・・・、うん・・・なんか眠くて・・・。」

「ごめん、いいよ。ゆっくり眠って。」

「うん・・・。」

そう言って頷くと絵羽はスッと目を閉じた。

そして、握っていた宙の手から絵羽の力がフツと抜けた。

「・・・。絵羽？」

「ちょっと、宙君、どいて！」

石田医師が、突然宙の身体を絵羽から引き離し、絵羽の瞳孔反応を見た。

同時に部屋に響いていた心電図の機械音が「ピーツ」という耳を刺すような音に変わった。

絵羽のベッドから一步離れた宙は何が起こっているのか全くわからず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「残念ですが・・・、ご臨終です。」

石田医師が力なく告げた。

石田医師が言った言葉は耳には入っているが宙の脳はそれを理解していなかった。

宙は目に映っている深々と頭を下げた石田と看護師の姿、絵羽の母親が絵羽の身体にすがり付いて泣き崩れている姿を見て、ハッと我に返った。

「絵羽？嘘だろ？今、眠るって言ったただけだよな。眠るって・・・。」

そついいながら一步步絵羽の横たわるベッドに向った。そして、がつくりと膝を付くと絵羽の身体にそつと手を伸ばしておなかの辺りに手を置いた。

「絵羽？旅行・・・、甲子園・・・、一緒に行くって言ったよな。絵羽・・・言っただよな！！」

突然大声で叫び、絵羽の身体を揺すりだした。

驚いた石田医師が宙の両腕を抑え絵羽の身体から引き離した。

「絵羽！一緒に行くっていったら！旅行も！甲子園も！いま・いま、眠るって言ったただけだろ！眠るって！俺との約束どうすんだよ！絵羽！！」

狂ったように叫ぶ宙に看護師も身体を押さえた。

「絵羽！！なんで！なんでおまえだけ！なんで？！」

そういうと再びがつくりと膝を落としてその場にうずくまって泣き叫んだ。

「絵羽！！絵羽　　！」

霧が深く立ち込めたその夜、絵羽は静かに眠るように息を引き取った。

「大丈夫か、宙・・・。」

「ああ、美樹生。うん、たぶん。」

宙と美樹生は絵羽の葬儀に来ていた。

最後の出棺が終わり、絵羽の最期を見送ったところだった。絵羽の母親からは斎場まで行って一緒に骨を拾って欲しいと頼まれたが、宙はどうしても行く気にはなれなかった。

確かに病院で絵羽の臨終の瞬間に立会い、絵羽の死を見届け、こうして葬式にまで顔を出したが、宙の中では絵羽が死んだことをまだ受け入れていなかった。

あと数日で夏休みに入る暑い日だった。

「ほんとに信じられないよ。絵羽ちゃんがこんなことになるなんて。」  
「.....」

「ああ、ごめん。まだ、おまえだって整理ついてないよな。」  
「うん。まだ、信じてない。」

「そうだよな。わりイ.....」  
「いや、いいんだ。本当は頭では全部わかってるんだよ、俺も。ただな、気持ちついていうか、心が受け入れてないんだ.....家ではお袋がすっかりしろっていうけど.....すっかりできないんだよな。」

「当たり前だよ。一番愛していた大事な人だったんだから。そんなの当たり前だよ。」

「ありがとう。美樹生、おまえっていつも俺の慰め役だな。」

「ばーか、気にすんな。幼稚園からの付き合いだろ。」  
「そうだな。一人でも俺の気持ちを理解してくれる奴がいるっていうだけで、死にたい気持ちが癒されるよ。」

「ばか！なにが死にたいだよ。おまえは絵羽ちゃんの分まで生きなきゃだめだろ！」

「だよな。そう、絵羽は.....死んだんだよな。」

「宙.....」

すっかり空は夏になり、遠くには大きな入道雲が浮かんでいた。

「お袋！じゃ！行ってくる。」

「ああ、気をつけてな。連絡してこいよ。」

「ああ、うん。手紙書くよ。」

「手紙？なんで？電話でいいわよ。」

「いや、手紙にする。なんか・・・、手紙がいい気がして。」

「そっか、わかった。じゃあ、手紙書いておくれ。待ってるから。」

「うん。そうするよ。じゃあ、行ってくる。」

「あ！宙！」

「うん？」

「信じてるからな。おまえのこと。」

母親のその言葉に何も応えず、ただ、フツと微笑を返して宙は家を後にした。

夏休みに入り宙は一人旅に出ることにした。最初母親に言った時には成績も下がってるのに塾でも行けと散々言われたが、どうしても自分の気持ちを整理したいことを説明すると母親も折れた。そして、旅の資金までくれて、快く送り出してくれた。

改めて母親に感謝した。本当は絵羽の後を追って死に場所を探すため旅に出ようと思っていたのだが、母親のことやそんなことをしても絵羽が喜ばないということに気づいて、その気持ちはもう消えていた。

でも、どうしても旅には出たかった。絵羽との今までのことを整理すること、そして、これから自分がどうして生きていけばいいか考える時間が欲しかった。そのためには見知らぬ場所、空間が必要

だと考えた。そして、宙は街を出た。

行き先は北海道に決めていた。当初は甲子園に向うことも考えていたが、残念ながら美樹生は準々決勝で敗れて最後の夏を終えていた。美樹生は『約束を果たせなくてごめん。』と泣きながら言ってくれた。絵羽が亡くなっても宙を元氣付けるために甲子園に絶対行くと言っていたからだ。改めて美樹生の優しさに触れた宙は友達のためにも死んだりしてはいけないと思った。でも、甲子園への道はそこで閉ざされてしまったため、行き先を考えていたところ、偶然HPを見て霧多布岬きりたつぶみさきというのが北海道にあることを知った。その名の通り夏の間はほとんど霧がかかっている岬らしい。絵羽との出会いの日が霧だったことを思った宙は迷わずそこを目指すことにした。

本来なら飛行機で釧路まで行つて陸路を霧多布まで行けばすぐなのだが、敢えて電車での旅にした。おそらく絵羽と旅行に行っていたらお金もないので、電車の旅になるだろうと思った宙は電車を乗り継ぎながら霧多布を目指した。

上野から東北への鈍行に乗った宙は、夏休みで混んでいる車内に乗り込んだ。ちょうど、四人席の窓側が空いていたので、そこに座った宙は、一息つくくと、持っていたペットボトルのお茶を飲み、ゆっくりと流れる景色を見つめていた。

「おや？一人旅かい？学生さん？」

前の席に座っていた老婦人が声を掛けてきた。

「ええ、一人旅です。高校生です。」

「へえ、高校生で一人旅かい。えらいね。うちの孫ももう、高校生になるけどどちらやらちやらして頼りないんだよね。あんたはしっかりしてるね。」



「いえ、そんな・・・。」

『えらい。』と言われて、なんだか照れくさかった。旅の動機はそんな立派なものではなくいわゆる傷心旅行なのだからあまり格好のいいものではない。

「どこへ行くんだい？」

「はい、北海道まで。」

「北海道？！この鈍行でかい？」

「はい、学生ですから、お金ないですから。」

「へえ、益々えらいね！うちの孫につめの垢を煎じて飲ませてやりたいよ。」

また、そういわれて照れくさくなった宙は愛想笑いを浮かべた。これ以上いろいろ聞かれるのは面倒と思ったので逆に聞き返した。

「おばあさんはどちらまで？」

「あたしかい？あたしはその孫に会いに仙台までね。」

「仙台にいらっしゃるんですか、お孫さんは？」

「そう、仙台はいいよ。あたしも本当は仙台の生まれなんだけど、娘の頃東京に出稼ぎに来てね。ああ、出稼ぎっていつてもわからないかね。まあ、裕福ではなかったから中学を出たらお金を得るために東京に出てきたんだよ。」

「中学を出たら・・・ですか。その方がよっぽどえらいですね。」  
「そうかい？その頃は当たり前だったんだよ。まだ、戦前の話だからねえ。ちょうどまだ戦争が始まる二、三年前頃かね。あたしゃ長

女だったから、その頃は子沢山でね。兄弟が七人もいたから、家は農業だけでは食っていけなくて、金を得なければ生活ができなかったんだよ。」

「すごいですね。じゃあ、家族を支えていたんですね。」

「そんな、支えてるなんて格好のいいもんではなかったけどね。東京と言っても働いてるのは工場での労働者だから。しばらくは繊維を扱っていたんだけど、戦争が始まってその頃から軍

需工場で働かされてね。お国のためってんで、稼ぎにもならなかったけど、とにかく生きていくためには仕方なかったからね。」

「生きてくためには・・・ですか。」

「そう、働いている分にはなんとか飯は食えたからね。最も戦争が激しくなった頃はもう、工場も閉鎖されて、仙台に戻ったけど。でも、その頃出会ったのが、死んだ旦那でね。その人が東京の人だったもんだから、一緒に仙台に疎開して、戦争が終わって再び東京に出てきたんだよ。」

「へえ、大変だったんですね。戦争って。」

「ああ、だからろくな娘時代は過ごしてないからね。今のあんたたち高校生とかがうらやましいよ。それで、娘が出来て結婚したと思ったら娘婿の仕事の都合で仙台に転勤ときたからね。皮肉なもんだよ人生は。」

「ああ、それで仙台に行かれるんですね。でも、いいじゃないですか、里帰りできるみたいで。」

「あんたうまいこというね。そうだね。もう、娘以外身内はいないけど、まあ里帰りってことで考えればいいもんだね。」

「そうですよ。それに娘さんやお孫さんにも会えるわけですし。」

「そうだね。あんた、高校生のくせに、ほんとにしつかりしてるね。」

「いえ、そんなことないですよ。」

しばらくそんな風に話をしていたがやがて電車の揺れに釣られてその老婦人は眠ってしまった。ふと窓を見ると少し後ろの方に夕日が見えていた。

仙台に着いた時は、もうすっかり日が落ちていたが、想像していたより都会の街並みを見て家で待っている母親のことを思い出した。特にホテルは予約していなかったので、とりあえず駅の観光案内所に行つてその日に泊まれる安い宿を探した。ちょうど駅から近いビジネスホテルが空いているということで、そこに行くことにした。ホテルについてフロントに行くと観光案内所から連絡を入れてくれていたので、前金を払うと、すんなり泊まることができた。正直なところちよっぴりドキドキしていた。高校生が一人でビジネスホテルに泊まるなんて家出とかと間違われて何か問いただされるのではないかと思つたからだ。夏休みということもあり、一人旅の高校生とかはそれほど珍しくはなかったらしい。

部屋に入ると安い割にはそこそこ清潔な感じだった。

シャワーを浴びて、ホテルに着く前に近所のコンビニで買つてきていたおにぎりとお茶を出し、夕食にした。

「やっぱり独りで食う飯は味気ないな。」

ほとんど当たり前のように母親と食事をしていたことを改めてあらがたいことなのだと思つた。食事を終えてフツと窓の外を見ると月が出ていた。かかっていたレースのカーテンを開けてしばらくそ

の月を眺めていた。

目は月を見ていたが心は絵羽のことで満たされていた。

霧の中での出会いから絵羽が病室で息を引き取るまでをずっと巡らせていた。

絵羽との思い出はわずか四ヶ月足らずだったが、その一日一日を鮮明に覚えていた。交わした言葉もすべて頭の中に入っていた。その一つ一つ、一言一言を心の中に再び焼き付けるように反芻していた。

翌朝再び鈍行に乗り込むと次の目的地青森の今別町を目指した。そこは青函トンネルの東北側の町だった。鈍行で約6時間の道のりだった。

今別に着くと早速宿を探した。小さな町なのであいにくビジネスホテルのようなものはなく、小さな観光案内所で民宿を世話された宿に着くと一人の初老の男性が出迎えてくれた。

「お世話になります。東京からきました江口 宙です。よろしくお願いします。」

「おう、こっだらとごまで、たんだでつたねえ。」

「・・・・。」

いきなりの津軽弁に宙は意味がわからず閉口した。

「あ、すまね。えっと、遠くからたいへんだっただね。どうして、こんなところまできたんだ？」

「はい、北海道まで行こうと思ひまして。」

「ほう、北海道はどさ（どこへ）いくの？」

「霧多布岬<sup>きりたつづみさき</sup>まで。」

「霧多布岬？」

「はい。」

「そこには、どなたがいるのか？」

「いえ、誰も。」

「じゃあ、そんなとまで何をしにいくだ？」

「……目的はないんですが……ただ、行ってみたくて。」

「……、そっか、まあ、若い頃はそういうこともあんだね。」

「……。」

「ところで、腹減ったろう？もうすぐ晩飯だで、ひとつ風呂あびできな。」

「あ、はい、ありがとうございます。そうさせていただきます。」

「はははは、そんなに硬くならんでもいい。自分ちだと思ってくつろいでくれ。」

「自分ち……ですか？はい、そうします。お世話になります。」

「あははは、それじゃかわらんじやろ。まあ、ええわ。風呂いつできな。」

「はい、じゃあ、風呂行ってきます。」

宙は民宿にあるそれほど広くはないが温泉だという風呂につかった。

「ふう、やっぱ、日本人は風呂だな。ホテルのシャワーじゃ疲れが

とれなかったし。」

言いながら自分が親父くさいことを言ってることに一人で照れた。同時にいつも絵羽に「おやじくさい！」と言われていたことを思い出し、また、心の芯が締め付けられるような思いがした。

湯船に頭まで浸かって息を止めた。

お湯の暑さとその圧力で息苦しさに耐え切れず思い切り顔を上げた。

「はあはあ・・・。」

息をしながら、絵羽は死ぬ間際もつと苦しかったんじゃないかと病室で苦しんでいた絵羽の姿を思い出した。

「でも・・・俺が死ぬわけにはいかないんだよな。」

ぼつりと独り言をいったあと、窓から見る赤く染まった空を見ながら、大きなため息をついた。

「おお、上がったかい。晩飯の用意ができたで、居間まで来な。」

そこには、予想に反してご馳走が並んでいた。

見たこともない野菜のてんぷらや刺身まであった。

「ここでは魚も獲れるんですか？」

「ああ、猟師町も程近いで、魚は新鮮じゃぞ。」

食べてみると確かにうまい。山菜のてんぷらもいける味だ。

「なんか、自然な感じでうまいです。」

「あははは、お客さん東京だっけか？都会じゃこんな野趣やじゆなものは食べれんだろ。がっぱど（たくさん）食べでな。」

「はい、いただきます。すみません。もういっぱいご飯を。」

「あははは、飯食って元気になっただか。えがった。えがった。」

言われてみて、宿に来たとき元気のない顔をしていたことに気づかされた。

「ご主人はこの民宿を一人で切り盛りされてるんですか？」

宙が尋ねると、主人は大声で笑い出した。

「あははは！まあな。嫁はとうに死んだで。もう、十年ぐれえ一人で切り盛りしでる。」

「十年ですか？一人で寂しくはないですか？」

「ん、寂しくくはないが、一人も気楽でいいもんだ。それに、あなたのよう旅の人とも話せるで、楽しいことも多い。」

「そうですか、つまらないこと聞いてすみません。ご馳走様でした。」

「ええで、はい、お粗末さまでした。元気になつてよがった。」

食事を終えた宙は部屋に入り、敷かれている布団に寝転がった。

「ふう、やつぱり、落ち込んでる風に見えるのかな、俺。」

宙は、しばらく天井を見つめていた。

今までの旅では何か現実じゃないような、いつもどこかで緊張している自分がいたことを思っていた。でも、この宿はなんだか落ち着く。しばらくそんなことを考えていた宙だったが、いつの間にか眠ってしまった。

「おはようございます!」

「おう、おはよう。夕べは良く眠れたか?」

「はい!お蔭様ですぐに寝ちゃいました。なんか、ここは安心できで。ホッとしちゃったみたいで。」

「そつがー、それはよかった。」

老人は目を細めてにっこりと笑った。

「本当にお世話になりました。」

朝食を済ました宙は旅支度を整えて、民宿の玄関にいた。そして、世話になった老人に深々と頭を下げて挨拶をした。

「元気になってよかった。気をつけていぐだよ。」

「はい!ありがとうございます。じゃ、いつてきます!」

「はい、いつてらっしゃい。」

なんだか、身体も心もすごく軽く感じた。あの宿で過ごしたたった一晩で今までの疲れや緊張や重苦しさがすっかり抜けた気がした。ぼくとつとした老人と交わした言葉が何か癒しを与えてくれた。交わした言葉は別にこれといって特別なことではないのに。何か不思議な感じがした。



再び電車に乗り、いよいよ北海道に乗り込んだ。そして、できるだけ早く霧多布岬に着きたいと思った宙は、「とにかく、いけるとこまでいこう。」と時刻表を見ながらその先の予定を立て、昼食もとらずに電車を乗り継いだ。

## 第6話：霧多布岬

「やっとなつた！」

霧多布岬にいくための浜中はまなかという駅に降りた宙は、大きく伸びをして、深呼吸をし、声を上げた。

今別の町から約半日、すでに日は西の空に傾きかけていた。

「やべえ、宿見つけないや。」

観光地とはいえ、北海道の中では小さな町だったので大きなホテルや旅館はなさそうだった。とりあえず駅に向かい霧多布岬の近くの宿を紹介してもらった。

その宿までは浜中駅からバスを利用して役場前というバス停まで行き、そこから徒歩で五分くらいのところにあった。とてもこじんまりとした小さな宿だった。

「いらつしやいませ。ご予約ですか？」

「あ、先ほど駅の案内所で紹介を受けた者ですが。」

「あーはいはい、高校生の方ね。お待ちしました。どちらからですか？」

「あ、えつと東京です。」

「あら、東京から？高校生なのに一人旅ですか？えらいですね。」  
「あ、えらくはないです。」

「そうですね、確かにイマドキは高校生が夏休みに一人旅するのは珍しくはないですけど、でも、ふつう、もっと大きな観光地に行

くのはどうして、こんな辺鄙へんぴなところにお寄りですか？」

「あ、えつと霧多布岬、そこに行きたくて。」

「それが目的で？」

「はい。そうなんです。ここに來たくて。」

「変わってますね。あ、ごめんなさい。ここは岬の眺めは確かにきれいですけど、名前の通りほとんど霧がかかってその眺めも見られないことも多いですよ。お客様が滞在中に霧が晴れるかはわかりませんからね。」

「いいんです。その、霧を見に來たんですから。」

「霧を・・・ですか？」

「はい。」

「そうですね。」

少し怪訝けげんそうに、案内をしてくれた女将らしき人は、宙の顔を見つめた。

部屋に通された宙は、宿の窓から岬を眺めた。女将が言っていたように、霧でほとんど岬の先の海は見られなかった。すでに日も限っていたため、ほとんど風景はわからなかった。

夕食を済まし、風呂に入って、疲れていたので早めに床に入ったが、やはり絵羽のことは常に頭から離れなかった。

『絵羽、おまえは本当に俺の前からいなくなってしまったのか。おまえとの出会い、一緒に過ごした三ヶ月は、いったいなんだったんだ？』

その問に誰も答えることはなく、宙自身、空しい問とわかっていった。

そうこう考えているうちに、宙は旅の疲れが出て、寝入ってしまった。

そして、夢を見た。

絵羽が、出てきて遠くの方でにつこりと微笑んでいる。宙は必至に近づこうとするが、その距離は全く縮まらない。だんだんと息苦しくなっていくが、どうしても絵羽に近づけない。

でも、絵羽はずっと微笑んだままこちらを見ている。

「絵羽！いくなー！」

夢の中で大声で叫んでいるのに、その声は絵羽に届いていない。

そして、今度は絵羽のほうがどんどん遠ざかっていく。

「絵羽！いかないでくれー！」

絵羽の姿が今にも消え入りそうになったとき、どこからともなく声が聞こえた。

「きつと、また会えるよ。」

その声は確かに絵羽の声だった。

「ハッ！はあ、はあ、夢・・・か。」

ぐっしりと寝汗をかいだ宙は、息を荒げて眼を覚ました。

時計は午前四時少し前だった。

もう一度寝ようとも思ったが、強烈な夢のおかげですっかり眼が

さえてしまった宙は、着替えて散歩に出た。

一歩外に出るとあたりは着いた時よりも霧が深くなり、ほとんど二、三メートル先が見えなかった。

「ちょうど、こんな霧の日だったな。絵羽と出会ったのは・・・。」

そんなことを、ぼーっと考えていた宙の目の前に急に光が現れ、その瞬間身体に衝撃を感じた。

ドン！キキッー！ガチャン！

何かにぶつかられて尻餅をついた。

「あいたたた。ちょっと、どこ見て歩いてんのよ！」

声のする方向を見ると微かなシルエットで座り込んでいる誰かがいた。

「あ、すみません。大丈夫ですか？」

立ち上がった宙はその声の方向に歩いていった。

近づいてみると自転車が転がっていて、そのすぐ傍に後ろ向きに座り込んだ女性がいた。

「大丈夫ですか？怪我しました？」

「大丈夫じゃないわよ。いきなりぶつかってくるから。」

さっきよりは女性のトーンは下がっていたが、怪我をしているら

しく声が弱々しかった。

「すみません。霧で何も見えずに、光が見えたと思ったたらよけられずに……。」

「もう、わかったわよ。あんたここの土地のもんじゃないでしょ？」

座り込んだ女性は尋ねてきた。

「あ、はい、昨日着いたばかりで……東京から観光で来たんです。」

「だろうと思つたわ。ここの者ならこの霧も慣れてるからすぐ気配を感じて避けられるもんね。」

「はあ、すみません。大丈夫ですか？手を貸しますか？」

「うん、起こしてくれる？」

「あ、はい。」

そついつと宙はその女性を後ろから腕をもつようにして抱え上げた。

「ふう、ありがとう。」

そついつて振り返ると眼鏡を掛けた同い年くらいの女の子だった。霧が深く、暗さもあってその顔ははっきりとわからなかったが、どうにか身体の方は大丈夫そうだった。

「ありがとう。さつきは気が動転していて怒鳴って悪かったわ。私の家、すぐそこだから、もう、大丈夫よ。」

「そうですね、じゃあ、そこまで送りますよ。自転車持ちます。」

「そう、じゃ、お願いしようかな。」  
「はい。」

そういうと、宙は転がっている自転車を起こし、彼女の横に並んだ。

「東京から来たって言ったけど、なんでこんな時間に出歩いているの？それに、こんなところに来たの？たいした名所もないのに。」  
「あ、寝てたんですけど目が覚めちゃって、散歩してたんです。それに、ここ、霧多布に来たかったんです。」

「霧多布に？なんで？」

「あ、んゝ理由は色々なんですけど、とにかくここに来たかったんです。」

「そう、変わってるね。あんた。」

「そうですかね。やっぱりそうですか？」

「そうね。あまりそういう人はいないわね。ところで歳いくつ？」

「はあ、高2、17です。」

「あ、なんだ！じゃああたしとタメじゃん。」

「え？そうなんですか？」

「いいよ。タメなんだからため口で。」

「あ、そうですか・・・じゃなくて、そうなんだ？」

「あははは、やっぱり変わってるね、あんた。名前は？」

「宙、宇宙の宙って書いて宙だよ。」

「ソラ？名前も変わってるね。私は葵、水戸黄門の葵の紋章のアオイってわかる？」

「うん、なんとなく、一文字で書くアオイだよな？」

「そう、たぶんそれ。」

「あははは、なんか君も変わってるね。」

「なによ。いきなり失礼じゃない！」

「先に言っただのは君だよ。」

「あ、そうか。あははは、そうだね。これでおあいこだ。」

「あははは、そうだね。」

「あ、わたしんちすぐそこだから、もういいよ。」

「あ、そう。じゃ、気をつけて。」

「宙こそ、気をつけなよ。あんた来た道わかってる？霧が深いから迷うかもよ。」

「え？だって一本道だったよね。」

「あ、それはわかってたんだ。」

「当たり前だろ。いくら土地のもんじゃなくてもわかるよ。」

「そっか、それは失礼致しました。」

「なんか・・・、初めて会った気がしないな。」

「そう？そうね。なんか、同い年だからかな。実はこの辺、若者いないのよ。それで、ちよっとうれしくなっちゃってさ。」

「そう。じゃ、俺帰るね。」



「うん。」

「じゃ、」

「あ、宙！」

「ん？」

「あのさ、ここにはいつまでいるの？」

「うーん、あと三日くらいかな。」

「そうなんだ・・・、じゃあさ、明日、いや今日なんか予定あるの？」

「え？いや別にないけど。」

「そうなんだ。じゃあ・・・案内するよ、この辺。どう・・・かな？」

「え？それはありがたいけど。葵・・・さんこそ、予定ないの？」

「葵でいいよ。それに予定ないから誘ってるんじゃない。」

「そっか、そうだよな。じゃあ、お願いしようかな。」

「ほんと！じゃあ、朝、朝食の後、九時くらいにそっちの宿行くよ。」

「うん、じゃあ、宿の玄関で待ってる。」

「うん、じゃあ、あとで。」

「うん、またあとで。」

こうして、葵と宙は約束を交わして別れた。少し恥ずかしそうに葵は振り返らず小走りに霧の中へと消えていった。

「ふう、なんか、へんだな。なんか・・・絵羽と話しているみたいな錯角に陥った。葵・・・か。」

そうつぶやくと宙も元来た道を宿へと戻っていった。

朝、朝食を済ませた宙は葵との約束の九時少し前に玄関先に立っていた。

夕べと違って今朝は良く晴れて霧も出ていなかった。

「おはよう!」

「おう、おはよう。」

葵は九時ぴつたりに旅館の玄関先に現れた。

「時間厳守だね。」

宙が言つと、

「あたりまえでしょ。一応お客さんだから、遅刻したら失礼だからね。」

どこことなく嬉しそうに葵が言った。  
その笑顔に宙はハツとした。

「絵羽・・・。」

「え?なに?なんか言った?」

「え?いや、なんでもない。独り言。」

「へんなの。やっぱ変わってるよ。君。」

葵の笑顔が絵羽の微笑みに見えた。葵は顔の大きさに比べ少し不釣り合いな大きめの眼鏡を掛けていた。しかも銀縁ぎんぶちのさえない感じの眼鏡だ。でも、夕べは暗く霧もあったため、気づかなかったが、眼鏡の下の葵の微笑みは絵羽の面影と重なって見えた。

『どうしても絵羽のことは忘れられない。』心の中で宙は改めて絵羽への深い愛情と自分の思いを確かめた。

案内するといって少し先を歩く葵の後姿に絵羽のことを投影させていた。

近所を歩きながら、葵が近場の観光スポットを紹介してくれた。昼近くになったので、二人は葵の案内で近くにあった食堂に入った。

「結構歩いたからおなかすいたでしょ？」

「え？ああ、うん。」

「何食べる？オススメはやっぱ魚料理かな。どうする？」

「あ、うん、葵に任せるよ。」

「そう、じゃあ、この定食にするね。すみません！」

葵は店員を呼んで注文を済ませた。

「なんか、元気ないね。疲れてる？」

葵に言われて少しドキツとした。

「え？ああ、長旅だったからね。ちょっと疲れてるかも。」

「そうなんだ。どうやってここまで来たの？」

そう聞かれた宙は東京から鈍行を乗り継いできたことを話した。

「へえーえらいというか、すごいというか、アホというか・・・。」  
「アホだけ余計だろ。」

「えへへ、怒った？」  
「金がないんだから、仕方ないだろ。高校生なんだからわかるだろ？」

「えへへ、そうだね。でも、怒ってちょっと元気になったみたい。」  
「こいつ！」

「きゃはは！」

宙が、頭を小突くふりをする、笑いながら葵はよけるふりをした。

「まったく、葵は子どもだな。」  
「なによそれ、宙だって子どもでしょ。」

「俺はこうして、一人旅とかしてるし、この旅でもっと成長したかな。葵とは違うよ。」  
「なによ、えらそうに、ちょっと旅したからってそんなに急に大人になるわけないじゃん。」

「ふん、肉体的にも精神的にも鍛えられるんだよ、一人旅つてのは葵みたいにくんなとこでボーっとくらしてるのと違うんだよ。」

「ひつどーい、なにそれ！いくら東京人だからって田舎者を馬鹿にしてるでしょ！」

ふくれっ面で齒向かってきた葵にさらに宙は追い討ちを掛けるように言った。

「田舎物を馬鹿にしてるんじゃないよ。葵のガキっばさを指摘したの。」

「なーによ、それ、もう、案内してやんない。」

「あははは、葵、怒った？」

「怒ったわよ。」

「さっきの仕返しだよ。やられっぱなしじゃ悔しいからね。」

「やっぱ、宙の方がガキじゃん。」

「なんでだよ！」

「きやははは、ほら、そうやってすぐ怒る。」

「あ・・・しまった。」

「あははは、ほらね。やっぱ私のほうが大人だね。すぐにひっかかる。」

「くっそ、悔しい。」

そういった宙は思いつきり悔しそうな素振りを見せてチラッと葵を見た。

本当に楽しそうに笑ってる葵の様子を見て、凄くホッとしてる自分を感じていた。同時にまた絵羽の面影を葵に映していた。

食事を済ませた二人は店を後にして、再び散歩をしながら、おしやべりをしていた。

「そついえばさ、どうしてこんなところに来たの？」

「え？ああ、うん、色々あってね。」

「そう、出会ったときもそう言ってたよね。なんか話しづらいこと？なら聞かないけど。」

「うん、まあ・・・。」

「そつか、じゃあ、無理に言わなくていいよ。とりあえずこの三日は楽しもうよ。嫌なこととかあったらゼーんぶ忘れてさ。」

「うん、ありがとう。葵、いいやつだなおまえって。」

「なによ、いきなり・・・ハズイじゃん。」

照れる葵の仕草や言葉遣いがまた絵羽を思い起こさせた。

「あのさ、少しだけ・・・聞いてくれるかな？」

「え？うん、いいよ。」

「あのさ、俺、実は・・・傷心旅行なんだ。」

「傷心旅行？失恋でもしたの？」

「え、ああ、うん、そんなところ。」

まだ、出会ったばかりの葵に絵羽の死についての話はあまりに重いだろうと感じて誤魔化<sup>ごまか</sup>した。

「ふーん、そうだったんだ。そうだよね。普通の若者ならもつと観光地にいくのにわざわざ、こんなところ選ぶのはおかしいもんね。」  
「……………」

「あ！まさか！」

「え？なに？」

急に大声を出した葵の声に思わず驚いた宙は聞き返した。

「あんたまさか、自殺しようとか思ってたんじゃないでしょうね？」  
「え？自殺？」

「そう、それで、この霧多布にきて、岬から身を投げようとか思ってたんじゃないでしょうね。」

「え、いや、そんなことは思ってたないよ。」

少しはそんなことを考えなくもなかった宙はちよつと動揺した。

「ほんと？あやしい……………」

そう言つて葵はじろりと宙の顔を睨<sup>にら</sup>んだ。

「おいおい、大丈夫だよ。そもそも、そんな勇気ないから。」

「死ぬのが勇気なんて馬鹿なことじゃないで。自分から死ぬなんて最低だよ。そんなの勇気じゃない。」

「あ、うん、そうだね。勇気じゃないよね。生きることのほうが何倍もつらいこともあるし。」

「そう、でも、自分から死ぬなんて絶対だめだよ。辛くても生きて、本当に死ぬ時まで精一杯大切に生きなきゃだめだよ。」

「うん、俺もそう思ってるよ。世の中には死にたくなかったって死んでしまう人だっているんだから、自分から命を絶つなんて絶対しちゃいけないって思ってるよ。」

「そっか、それ聞いて安心した。」

「わかってくれたんだ？よかった。」

「大丈夫、傷心だって、きつといいことあるよ。ほら、すでに君の目の前にいいことが来てるよ。」

「え？目の前にいいことが来てる？」

「そっ、ほら、こーんなかわいい葵ちゃんが目の前にいるでしょ。」

そういつてわざとらしく首をかしげてみせる葵の姿に思わず宙は吹き出した。

「あははは、そうそう、ほんとだ。目の前にいいこと来てるよ。あはははは。」

「ひどーい！なによ！人が元氣付けてあげようとしてるのに！」

プイッとそっぽを向いた葵の姿を見て、宙は絵羽のことを思い出しながらも葵の明るさや可愛らしさに惹かれている自分に気づいた。

「あははは、ありがとう。元氣出てきたよ。」

「ほんと？よかった。なんかさーほんと、へこんでたみたいだから正直ちよつと心配だったんだよ。」

「そっかー俺ってそんなにへこんで見えたか・・・。」

「うん、どん底って感じ。」



「だめだなあ、ほんとはこの旅行で吹っ切って、新たな自分になるんだって思ってたんだけど・・・。」

「新たな自分か・・・そんなに無理しなくていいんじゃない？」

「無理？」

「うん、うまくいえないけど、自分は自分だし、失恋した自分も自分なんだから、かえってそれを認めてあげたほうが、気持ちが楽になるんじゃない？」

「・・・。」

「つまりさ、どんな自分でも自分だから、そんな自分を好きになっただけで、自分を認めてあげれば、その方が気持ちが楽かなんてね。」

「そっか、そうだね。何も忘れることないのかな。」

「そうそう、嫌なことは忘れたらいいと思うかもしれないけど、それも受け入れていく方が、楽に次の自分になれるんじゃないかな。」

「そうだな。うん、そうだ！俺は俺だからね。彼女を好きだった俺も、俺だし、忘れることなんかないか。」

「だよ。なんか、ちよつと明るくなった？」

「うん、ちよつと吹っ切れた。ありがとう。葵。」

その後、葵の案内で町の資料館や温泉施設がある場所などを見て回ったが、ほとんどはおしゃべりに時間を費やしていた。

お互いの生まれ育った様子や東京の話、北海道の話など、お互いを知っていくための話は尽きなかった。

そしていつの間にか、日も暮れて、宙が泊まっている宿の夕食の時間が近づいてきた。

「あ、もう、こんな時間か・・・、そろそろ、宿に戻らないと晩飯食べ損ねちゃう。今日は一日ありがとう。」

「どういたしまして。ところで、明日のご予定は？」

「ん？いや、特には決めてない。」

「そう、それはよかった。では、明日もこの葵ちゃんがさらに観光ガイドをしてあげましょう。」

「ほんと？！うれしいよ！よろしくお願いします。」

「はい、もちろん、料金は請求するけどね。」

「え？！マジ？」

「うつそ、お金なんて取らないよ。」

「だあ、ったく、どこまで本気かわかんないな葵って・・・。」

「きやはは、まあ、そういう奴ですから。よろしく！」

そういつと葵はアイドルのように敬礼をして小首をかしげた。

「ふう、先が思いやられる。」

そっいいながら、絵羽には悪いと思いつながらも、宙はどんどん葵に惹かれていく自分を感じた。

## 第7話：変化

翌日、同じように九時に旅館を出て、葵と合流し、霧多布周辺を案内してもらった。

「ここが岬への入り口、ちょっと深い森のようになってるから、足元、気をつけてね。」

そこは、昼間なのに外からの光を遮り、ちょうど木々がトンネルのようになって生い茂っていた。

「へえ、なんかひんやりするね。」

「でしょ。真夏でもこの平均気温は17度くらいでとても涼しいから、こうして日陰に入ると、もっと体感温度は低くなるんだよ。」

「へえ、都会のうだるような暑さはここにはないんだね。」

「そうね。都会の暑さは良く知らないけど、たぶん、そんなことはここにはないわね。あ、そこ気をつけて。」

そういうと、いきなり葵は宙の手を握って引っ張った。

「あ、うん。」

とつさのことでもとても自然ではあったが、宙は葵と手を繋いだことにちよつと照れてしまった。

引っ張ってくぼみを越えると、何もなかったようにパツと葵は手を離れた。

「なんだ……。」

「ん？なんか言った？」

「え？いや、何も……。」

「うそ、なんか言ったよ今、『なんだ』とか『かんだ』とか。」

「かんだとかいってないよ。」

「例えだよ。」

「わかってるよ。別に独り言。」

「ふーん……、あたしにはなんか、残念そうに聞こえたんだけど。」

そういわれて宙はドキツとした。実は、葵があっさりと手を離れたので、ちよつとがっかりして、思わず言葉が出てしまったからだ。

「えへへ」

そう言いながら、葵はちよつと俯いている宙の顔を覗き込んだ。

「な、なんだよ！」

そういった宙の手を葵はにっこり笑いながら、いきなり握り、そのまま引つ張っていった。

引きづられるように宙は葵についていった。

「っちよ、ちよつと、いきなりなんだよ。」

「うふふ、手、つなぎたいんでしょ？」葵はニコニコしながら、でも、まっすぐ前を向きながら宙に尋ねた。

「え？違うよ。別にそんな……。」

「いいのいいの、これはサービス。観光案内のオプションでございます。」

そう言うと葵はチラッと宙の顔を振り返ってウィンクした。

「え……。」

ちょっと照れたが、俯きながら宙も笑顔になっていた。とても自然に手を繋いで歩いていた。葵の手は、小さくすっぽりと包み込めるほどだったが、やわらかく、とても温かった。そして、絵羽の手の感触ととてもよく似ていた。

「ほら、ここが岬の入り口。」

木々のトンネルを抜けるといきなり視界が広がった。そして、太陽の光が急に差し込み一瞬明るさで目がくらんだ。

目が慣れてくると、少し先に広がる真っ青な空とかすかな波の音が聞こえた。

「あと、少しで岬だよ。」

再び手を繋ぎながら葵は宙を引っ張るように先に進んだ。

次第に波の音がはつきりと聞こえてきて、道がさらに開け眼下に空の色とは対照的な深い蒼あおの海が広がっていた。

『ついに来た。霧多布岬』宙は心の中でつぶやいた。

岬の突端までいくと、人が落ちないように柵があったが、それでも、断崖は覗き込むと吸い込まれそうなほど急だった。岬に波がぶつかり勢いよく砕け散っていた。

宙はしばらく、言葉が出ずに海と空とを見つめていた。  
葵もそんな宙の様子を見ながら黙って海を見つめていた。

「ふう〜、やっぱり自然はいいね。」

宙が、言葉を発すると、葵はフツと宙のほうを振り返って言った。

「うそ。」

「え？何が？」

「今、そんなこと、考えてなかったでしょ？」

「え？なんで？」

「でしょ？」

少し問い詰めるように葵は宙の目を見つめながら言った。

「え、ああ、うん。うそ。考えてなかった。」

「ふふ、わかるよ。別れちゃった彼女のこと考えてたでしょ？」

「え、ああ、うん。考えてた。」

「やっぱりなあ。よっぽど好きだったんだね。その彼女のこと。」

「え、ああ、まあ。」

「好きだったの？好きじゃなかったの？」

急に葵が語気を強めて、宙に詰め寄った。

「え？ああ、好き、好きだったよ。世界で一番好きだった！」

宙は問い詰められて思わず勢いに任せて応えてしまった。

「そう、ならいい。幸せだね。その彼女。」

今度は一転して急にトーンを下げて葵は言った。

「え？そうかな？幸せだったのかな？」

「幸せだよ。誰かに『世界で一番好きだった』なんて言われたら、幸せに決まってるじゃん。あたしだって言われたい。」

「え？葵も？そう言えば葵は今彼氏とかいないの？」

「いない。私ブスだし、性格きついから。」

「そんなことないよ。充分かわいいし、確かに性格は強そうだけど、優しいところもあるし。」

「なんだそれ？やっぱ性格きつそう？」少し不機嫌に葵が言った。

「あ、これは失礼。いや、なんていうかさ。きついんじゃないって、すっかりしてるっていうか、でも、こうして見知らぬ俺を傷心旅行だからって慰めてくれるために観光案内までしてくれて。やっぱ優しくなければできないよ。」

「.....」

「そう、それに、そのめがね。コンタクトにしたら？きつとかわいいと思うよ。」

そういうと、宙は、そつと葵の眼鏡を外した。

葵の潤んだ瞳が宙の左右の目を交互に見ながら不安そうに見つめていた。

「ほら、やっぱかわいい。」

そついいながら、宙はジッと葵の顔を見つめた。  
大きな波が岬にぶつかった音で、宙は我に返った。

「あ、ごめん。これ。」

そつ言つて宙はメガネを葵に返した。

「あ、うん。」

そつ言つて、葵も眼鏡を受け取り掛けなおした。  
また、しばらくの間、二人の間を沈黙が支配した。

「さ、そろそろ、次の観光スポットに向かいましょう！」

突然、葵が大きな声で言った。

「わあ、ビックリした。そう、だね。じゃあ、次をお願いします。  
ガイドさん。」

「きやははは、いいかも、ガイドさんつて。」

「だろ？ははは」

二人はまた元のように戻ったが、朝旅館を出発した頃より少しだけ二人の距離が縮んだ感じがした。

「今日はありがとう。マジ楽しかったよ。」

「ほんと？そう言ってくれるとガイドの甲斐があったわ。」



「ほんと、ほんと、いろんなところ見れたし、地元の人じゃなきゃわからないようなレアスポットも知れたし、満足、満足、名ガイドだよ葵は。」

「えへへ照れるな。そう？私ガイドの道に進もうかな。」

「あ、いいかも。向いてるかもよ。」

「ほんと？マジ考えちゃおうかな。」

「葵ってさあ。」

「ん？なあに？」

「結構単純？」

「なにそれ？！どういう意味よ！」

「はははは、怒った？」

「ったく、折角ガイドしてあげたのに、もう、知らない！」

そついうと葵はプイツと後ろを向いてしまった。

「ごめん、ごめん。冗談だよ。葵はほんとにいいガイドになれるよ。」

「もう、遅い。」

まだ、後ろを向いたまま機嫌が直らない葵に困った宙は

「ねえ、葵ちゃん、機嫌直してよ。ごめんよ。」

「だーめ。」

「困ったなあ。どうしたら機嫌直してくれる？」

しばらく黙っていた葵が突然クルツと振り返って言った。

「ごほうび!」

「え?なに?ご褒美?」

「そう、ごほうびちょうだい。ガイド料。」

「え?お金?」

「ち・が・う、ご褒美、お金じゃないご褒美。」

「えゝ、難しいな。お金じゃないご褒美って・・・、なにあげりやいいんだ?」

「キスして!」

そう言うとき葵は宙に向って、口を突き出してキスをねだった。

「え?ちよつとそれは・・・。」

「やっぱ私がブスだからできないんだ。」

「ち、違うよ。だって俺たちまだ出会って間もないし、キスってそれは恋人とか好きな人同士がするもので・・・。」

「やっぱ、前の彼女の方がかわいいんだ。」

「え、いや、かわいさは変わらないけど、ほら、俺たちまだ高校生だし。」

「高校生ならキス位してるでしょ。宙はその彼女としなかったの?」

そう聞かれて、絵羽と交わしたキスを思い出した。

「ほら、やっぱしてる。私とはできないの?」

「え? いや、その、ほら俺たち恋人ではないし。」

「どっち? キスしたいの、したくないの?」

「いや、したい!」

思わず出てしまった自分の言葉に宙自身驚いた。

「じゃあ、して。」

再び葵は目を瞑<sup>つむ</sup>って宙に向って唇をつぐんでねだった。

『くそ、こうなりや、やけだ。』

そう思った瞬間絵羽の顔が浮かんだ。

『絵羽・・・ごめん。』

そう思いながら、葵の唇に軽く自分の唇を合わせた。時間にすれば一秒もない。

「もう終わり?」

葵がキョトンとして宙を見つめていった。

「もう、許して、せいっぱい。」

グツタリしている宙を見て、葵は笑い出した。

「なんだよ。葵が言い出したことだぞ。」

「きゃはは、本気にしたの？宙？かわいいね。私だってキスくらい経験あるよ。なのに、すつごく重大に考えて、チュだって。きゃははは。」

「まいった。もう、何も言いません。」

グツタリした表情で宙はその場にへたりこんだ。

「ごめん。ちょっとわがまま言い過ぎたね。お詫びに明日も遊んであげるから。」

「はいはい、よろしくお願いします。」

ため息をついている宙におかまいなく、葵は明日のスケジュールを伝えた。

「じゃあ、明日また九時に旅館の前でね。」

「はい、待ってます。」

まだ腰を下ろしている宙に近づいてきた葵は、宙の顔を下から覗き込むように、しゃがみこむといきなり宙の唇にキスをした。時間にすれば二秒くらいだったがさつきよりは少し長かった。

あっけに取られている宙をその場に置いて葵は小走りに家のほうへ駆けていきながら、宙のほうを振り返り、にっこり微笑んで、再び振り返って走り出した。

呆然として宙はその場に佇んでいた。

旅館の部屋に戻った宙は敷いてある布団に寝転がって天井を見つめていた。

絵羽と葵の顔が交互に浮かんでは消えた。

「俺どうしたんだろ。あれほど絵羽のこと思ってたのに。今は葵に惹かれてる。」

そういつて寝返りを打った宙は罪悪感に似たものを感じていた。

「忘れなきゃいけないのかな。絵羽のこと……。じゃないと、前には進めないのかな。」

そうして、布団にもぐりこむと頭から布団を被って真っ暗な中でジッと考えた。

「俺っていいかげんな男なのかな。でも、葵は生きてるよな。絵羽は死んでしまったんだよな。」

宙は自分に言い聞かせるように独り言をつぶやいていた。でも、心の中では何かが闘っていて、納得することが出来なかった。そして、いつの間にか歩き回った疲れが出て眠ってしまった。

## 第8話：生れた日

翌朝は八月十五日、宙の誕生日だった。約束の九時に旅館前に出ていると、時間通り葵がやってきた。

「おはよう！」

宙は、葵に昨日キスを交わしたことなど忘れたかのように明るく挨拶をされて少し拍子抜けした。

「お、おはよう。」

「おいおい、元気ないなあ、宙君、今日も張り切っていこうじゃないか！」

そういつと葵は思いっきり宙の背中を叩いた。

「いて！なんだよいきなり。ゲホッゲホッ。」

むせる宙を尻目に葵はサッサと歩き出した。

でも、内心、宙は少しホッとしていた。昨日のキスで、ぎこちなくなったらどうしようかと思っていたので、葵の明るい対応に安心させられた。

「今日はね。我家へご招待だよ。」

歩きながら当たり前のように葵が言った。

「え？！我家って、葵のうち？」

「そう、わたしんち。」

「ちょ、ちよつとそれはいきなり、まずいよ。」

「なんで？別にいいじゃん。友達でしょ？」

「そりゃ、そうだけど・・・。」

「じゃあ、いいじゃん。友達の家遊びに行つて悪いことないですよ。あ、でも、キスしたからもう恋人か。」

「ゲホゲホッ」

宙は再び驚かされてむせた。

「恋人つて・・・。」

「違う？じゃあ、あのキスは嘘だったのね。」

しょんぼりとして葵が言うと、

「いや、嘘とかじゃないけど、いきなり恋人とか言われるとちよつと、ハズイというか、ビックリしちゃつて。」

「きやははは、またひっかつた。宙つて単純。」

「ひどいな、葵、またからかつたんかよ。」

「だって、宙つてかわいいんだもん。なんか弟みたい。」

「なんだよそれ。ばかにして。」

そういいながら、宙の心には絵羽と出会った頃のことを蘇った。

『私たち姉弟に見えるかな。』『弟へ、姉より。』

絵羽の言葉が思い出された。

「まあ、男性としては頼りないけど、かわいいから許しちゃう。」  
「なんだよ、それ。ったく、いいよ。どうせ頼りないですよ。」

「きゃははは、宙ちゃん、だーいすき！」

そういうと、葵のほうから手を繋ぎだした。再び触れた葵の手の  
感触が、宙の胸をキュツと締め付けた。

「ここだよ。」

そういつて案内された家は、広い庭の中にある、昔ながらの木造  
りの平屋の家がだった。宙にとっては、良くテレビで目にする田舎  
の家そのものだった。

「ちょっと古くて恥ずかしいけど、遠慮なく入って。」

「あ、うん、そんなことないよ。なんか、ホツとする。」

「そう？じゃあ、どうぞ、どうぞ。自分の家と思って寛いでくださ  
い。」

葵は、ガイドっぽい口調で促すと、自分も後ろから玄関の小上が  
りを上った。

「その居間に入って座ってて。」

「え、あ、うん。あのー、おうちの人は？」

「ああ、大丈夫、両親は働いてるから、今日は誰もいないよ。」  
「え？！」



「だから遠慮なく、そちらでお寛ぎください。」

そういうと、葵はサツサと奥の部屋に消えていった。

通された部屋は、畳10畳ほどの広さで、畳の先には廊下があり、そのまま庭の縁側へと続いていた。座らされたところは広い卓とその周りに座布団が敷かれていた。

「おまたせ。」

奥の方から葵が冷たいカルピスのような飲み物を持ってきた。

「わあ、なんか、CMに出てくる田舎の縁側でカルピスって感じ。」

「あーわかる。わかる。そういうCMあるよね。あと、そうめんとか、スイカとか、夏の原風景げんぶうけいって感じ。」

「そうそう。それ。すごい、なんかホツとする。」

「そっか、やっぱり都会と違うよね。私はいつもこうだから当たり前だけど。」

「うん、でも、来てよかったよ。葵んち。こんな経験、旅先でも出  
来ないからね。」

「ほんと？うれしい。よかった。喜んでもらえて。」

葵は満面の笑みでそう言った。その顔を見て宙もうれしくなり微笑んだ。

「縁側でどう？」

カルピスをお盆に乗せたまま、葵は縁側の方へ歩いていった。

「いいね。」

そついうと宙も立ち上がり縁側に向った。

「ふう、マジホツとする。」

縁側に腰掛けて庭に足を投げ出しながら、並んで座ってカルピスを飲んでいると宙から自然とそついう言葉が出てきた。

「そう。よかった。どう？癒される？」

「うん、癒される。っていうか、なんか頭からつばにできる。」

「いいことかもね。頭からつば。なんか考えることとか多いからね。」

「そうそう、おれら高校生は半分大人で、半分まだ子どもだから、大人と子どもの両方の悩みを抱えてるからね。」

「確かに。うまいこというね宙。ほんと毎日そんな感じだよ。学校のこと、家のこと、友達のこと。」

「彼女のこと。彼氏のこと。成績のこと。将来のこと。今のこと。昔のこと。いくらでも悩みは尽きない。」

「だね。でも、それって生きてるからこそ悩めるんだよね。死にたいくらいの悩みもあるけど、生きてるから死なないで悩んでるんだよね。」

「そう、死んだら悩みはなくなるかもしれないけど、生きてるからこそ悩むことも出来て、考えて、結論を出して、そして前に進んでいく。それが、人間なんだろうね。」

「そうだよ。それが人間。ほんと、生きてることは辛いけど、か

「けがえのないことだよね。」

「葵、俺ね。」

「ん？」

「俺、本当は死にに来たんだ。」

「……。」

「ん、正確には、死ぬのは思い止まって、お袋にも『死なない』って心の中で約束して、いざここまで来たんだけど、旅行の途中で『やっぱ死のうかな』って思ったことが何度あった。」

「……。」

「実はね。俺の彼女……死んだんだ。」

「え？」

「この夏前にね。白血病で……、まだ、付き合って一ヶ月の時に発病してね。それから、たった二ヶ月もしないうちに死んじゃったんだ。」

「宙……。」

「俺、どうして言いかわかんなくて……、この旅はその彼女を忘れて新しい自分になれることを目標に来たんだけど。まだ混乱してる。」

「忘れなくていいよ。」

「え？」

「忘れなくていいんじゃない。うつん、むしろ忘れちゃダメだよ。」  
「……。」

「出会った時もいったけど、その人のことはもう、想い出。忘れる必要はないんだよ。その上で新しい自分の生活を築いていけばいいんだと思う。」

「。。。。。」

「じゃないと、その子もかわいそうだし。。。」

そういうと葵の大きな瞳から涙がこぼれた。

「葵？どうして泣いてるの？」

「わかんない。ただ、宙に愛された彼女がうらやましい。そんなに悩んでくれる人がいてくれた彼女は幸せだったと思う。」

涙を流したまま葵は宙を見つめて言った。

「そうかな。幸せ感じてくれてたかな。」

「当たり前じゃん。幸せに決まってる。だから、今度は宙がしっかりと自分を見つけて幸せにならなきゃ。その人のためにも。」

「そうか、そうだね。俺が幸せにならなきゃ、だね。」

「そう。宙が幸せになれば、きっとその人も幸せをもっと感じてくれるはずだよ。」

「そっか、うん。ありがとう。葵、俺、もう大丈夫だよ。」

「よかった。でもね。私は、大丈夫じゃない。」

「え？」

「宙。。。」

そういうと葵は宙の身体に自分の身体を預け、その勢いでその場に倒れこんだ。

「葵？ちょっと。」

「宙……。」

葵がその涙に濡れた目でジッと宙の目を見つめて、そのまま唇を重ねてきた。

長いキスだった。始め、なすがままだった宙も、自分から葵の身体を引き寄せて、強く抱きしめた。

葵の部屋の布団の上で二人は身体を重ねていた。

「葵、本当にいいの？」

「……。」

静かに葵は頷いた。そして、目を瞑り、宙に身体を預けた。

宙はおそろおそろ葵の身体にふれていく。葵のワンピースのボタンをぎこちなく一つずつはずしていく。下着だけになった葵を見つめて自分も急いでＴシャツを脱ぐ。

再び身体を重ね合わせ、唇を重ねながら葵の胸に手を当てる。ドキドキと脈打つ心臓の鼓動を手のひらに感じる。

二人とも生れたままの姿になり、身体を重ね合わせて宙が葵の身体を開こうとした時

「待つて。一つだけ聞いていい？」

突然の言葉に宙はドキッとして体の動きを止めた。

「あのね。私を抱いたら、その彼女のこと忘れる？」

「え？」

「私のこと愛してくれたら、その彼女のこと忘れちゃうかな？」

しばらく、宙は考えていた。そして、応えた。

「いや、忘れないと思う。やっぱ忘れることはできない。だって、本当に愛していたから。」

「そう。よかった。いいよ。宙、来て。」

葵はそういうと、宙の首に手を回し、自分の胸に宙の顔を埋めるように優しく導いた。

宙は葵の中にそっと入り込んだ。頭の芯がボーッとするような感覚を感じた。葵の吐息だけがはつきりと耳の中に入ってくる。でも何も見えない暗闇の中にあるような錯覚を覚え、最後にすべてが光に包まれて真っ白な世界にいるような感覚が宙の頭の中いっぱいに広がった。

気がつくと自分の身体の下に葵が身体を小刻みに震わせながら呼吸を整えていた。

「宙、アイシテル。」

そういうと、葵は再び宙の首に手を回し、自分の胸に宙の頭を押し付けるように抱き寄せた。

宙の頭の中には、絵羽の顔が浮かんでいた。

『絵羽、俺は……。』

宙は心の中でつぶやいた。

ふと気がつくと、宙の腕の中で葵が寝息を立てていた。

宙自身少しまどろんでしまったようだ。夏でもひんやりとした空気が暗い部屋の中に満たされていた。

眠っている葵を起こさないように、そつと腕を抜くと、服を着た。しばらく眠っている葵を傍に座って見ていた。

「不思議だ。つい三日前に会ったばかりなのに、ずっと前から知っていたような。なんか出会うことが必然だった気もする。葵、君はいつたい誰なんだい？」

スースーと寝息を立ててる葵は応えるはずもなかった。

「でも、おかげで少し吹っ切れてきた気がする。ただね。やっぱり、まだ絵羽のことは忘れられない。葵は、『忘れなくていい』って言うってくれたけど、俺の中では、まだ「想い出」にはできない。まだ、絵羽の死を受け入れられないでいるんだ。今日は俺が生れた日だけど、まだ、新しい自分には生まれ変わらない。」

葵は深い夢の中にいるようで、ピクリとも動かない。

そんな葵の寝顔を見て、微笑んだ宙は、そつとほつぺたにキスをした。

「おやすみ、葵、明日、俺は帰るけど、また会いに来るね。」

そうつぶやくと、葵の家を後にした。

## 最終話：本当の旅立ち

葵の家を出た時はもう真夜中になっていた。外に出ると深い霧が霧多布中を覆っていた。

旅館へ帰ろうかと思ったが、こんな夜中に戻っても迷惑がかかると思い、そのまま岬の方に向って歩き出した。

岬の森は、一層暗く、霧も深さを増して、ほとんど前が見えない状態だったが、なんとか森を抜けて岬の入り口までたどり着いた。

「宙。」

声が聞こえる方向へ振り返ると深い霧の中に葵がいた。

「あれ？いつ起きたの？ついてきてたの？あ、めがね・・・どうしたの？」

何故か葵は、眼鏡を外していた。

「・・・・・・・・。」

少しずつゆっくりと葵は宙の方へ近づいてきたが、ずっとうつむきながら宙の問いに応えようとしなかった。

呆然と立ち尽くす宙にぎりぎりまで近づいた葵はゆっくりと、しかし、宙の顔をしっかりと見据えるように顔を上げた。

そして、眼鏡を外したその澄んだ瞳で宙の顔をじっと見つめた。

「葵・・・ちゃん？」

葵は、その声かけにも応えずにじっと宙の顔を見つめたままだった。



た。

「え？・・・、あ、・・・絵羽？絵羽なんだね。」

その問いに呼応するようににつこりと微笑み、目を細めた。そして、その場でくるりと宙に背中を向けた。

「・・・・・・・・。」どう次の言葉を出してよいか判らず戸惑っている宙に彼女はようやく口を開いた。

「ごめんね。騙してて。そう、私だよ。絵羽だよ。」

「絵羽・・・、どうして・・・だって・・・絵羽はもう・・・。」

宙は、この旅の間中ずっと絵羽のことを思っていた。忘れようにも忘れられなかった。

そんな時、葵と出会い、不思議に感じながらも、どんどん葵に惹かれていく自分に気づき始め、もしかしたら絵羽のことを『想い出』にできるかもしれないと思い始めた矢先の出来事に戸惑いを隠せなかった。

そして、今、目の前にいる絵羽に何を伝えたらいいか判らず、言葉がそれ以上は出てこなかった。

「座ろうか。」

宙は絵羽に促されて岬の傍にあるベンチと一緒に腰掛けた。

「ごめんね。今まで騙してて、『葵』なんて言って、この三日間ずっと悪いなって思ってたんだよ。」

「・・・・・・・・。」

「わけわかんないよね。そうだよ。私はもう死んだはずだものね。そう、確かに宙の目の前で私は死んだよ。」

「・・・、だって、じゃあ、今俺の目の前にいる絵羽は？なんなんだよ。幽霊か？」

「うふふ、そうね。幽霊かな。でも、夕べあなたは私を抱いたよね。いっぱい愛してくれたよね。」

「え、あ・・・うん。」

急に『抱いた』と言われて夕べのことを思い出した宙は恥ずかしさで言葉を失った。

「うれしかった。でも、ちょっと悲しかった。」

「・・・・・・・・。」

「あ、わかんないよね。うん。ちゃんと話すね。実はね。私は確かに死んだの。宙、天国って信じる？」

「え？天国、ああ、うん、あればいいなっとは思ってるけど。」

「あるんだよ。天国、ほんとは言い方が違うんだけど、でもね。確かに死んだ後いくこの世とは違う世界があるの。」

「・・・・・・・・。」

「それでね。そこには本当に神様がいて、ううん、これも正しくは神様ではなくて神様の命めいでその世界をまとめる人が何人かいてね。私みたいに死んだ人がその世界に入る前に、うーん、なんていうのかな。判りやすいかと面接、みたいなことをするの。」

「面接？」

「そう、そこでね。今までいた世界、つまりこの世で何か思い残し

たこととか、どんな人生だったとか、愛した人はいたかとか色々聞かれるの。」

「マジで？」

「あ、信じてないでしょ。今、宙の目、疑ってた。」

「あ、やっぱり絵羽だ。俺の目で俺の気持ちができるのは絵羽とお袋だけだから。」

「うふふ、でしょ。これで私が絵羽だったことは理解できたでしょ？」

「うん。」

「それでね。その人に聴かれたとき宙のこと話したの。宙にもう一度会って謝りたいって。」

「謝る？何を？」

「だって、宙と夏休みに甲子園で美樹生君の試合見て、それから旅行するんだって約束したのに果たせなかったでしょ？」

「ああ、でも、美樹生は結局甲子園にはいけなかったし、絵羽は・・・あつ・・・。」

「そう、死んじゃったしね。」

「ごめん。」

「ううん、謝るのはこっち。約束やぶっちゃったから。それで、その人に謝りたいって言ったの。」

「・・・・・。」

「そしたらね。私に時間をくれるって言ったの。この世に帰る時間を。ただし、三日間だけ。ほんとはね。人は死んだらこの世にいら

れるのは一月半くらい、ほら、よく四十九日っていうでしょ。あれ、ほんとなんだよ。大体五十日くらいいられて、その間に思い残したこととか、この世で行きたかったところに行くとか、未練がないようにするんだって。私はその五十日間ずっと宙のこと考えていて、あなたの家にも行ったりしたんだけど、どうしても約束が守れなかったことが申し訳なくて宙に会う勇気がなかったの。そうしているうちに時間が来て天国に行くことになってしまって、ずっとこの世に未練を残しちゃったのね。」

「うん。それで？」

「でね。その人が三日の間に宙に会ってちゃんと謝ってきなさいって言われたの。」

「ほんとに？」

「うん。宙がここへ来たのは偶然じゃないんだよ。ネットでこの場所知ったでしょ？」

「うん。たまたま見たんだけど。」

「あれね。私がやったの。実は、私この世にいられる時間で北海道にずっと行きたかったから行ってたのね。」

「え、旅行もできちゃうの？」

「うん。それもそこに行きたいって思うだけでいけちゃう。」  
「便利だな。」

「でしょ。それでね。偶然この霧多布岬を知ったの。」  
「え？じゃあ・・・。」

「そう、戻ってきてから宙のパソコンにわざと宙がここの場所を知るように仕掛けしたの。」

「そんなこともできるの？ますます便利だな。」

「もう、そんなことに感心しないで、私の話、真面目に聞いているの？」

「あはは、ごめん、ごめん。やっぱり絵羽だ。今のふくれっ面は絵羽そのものだ。」

「もう、知らない！人が真面目に話してるのに。」

「ごめん、ごめん。それで？」

「もう・・・、それでね。宙がここに来たくなるようにして、私は許された三日を宙とここで過ごせるように待ってたの。」

「そうだったんだ。でも・・・俺・・・。」

「ううん、わかってる。さっき悲しかったって言ったのはそれ。」

自分の心の中が絵羽には見透かされていることに宙は気づいた。

「葵に恋をして私を忘れられるかもって思ったんでしょ。」

「・・・うん。」

「ちょっと許せなかったけど、でも、葵をわたしと思って抱いてくれたでしょ。」

「うん、それも当たってる。」

「だからね。ちょっと悲しかったけど、私も騙してたんだし、ああいって思っで・・・、だから、それは許す。」

「凄い複雑だよ。本当は絵羽とこうなりたかったのに、やっぱり葵だと思ったら、本当にいいのか最後まで気持ちの整理がつかなかった。でも、絵羽は死んでしまったんだから、ここで整理をつけなき

やいけないのかもって思ったりもしたし・・・。」

「ごめんね。初めから絵羽で会えばよかったかもしれないけど、私も宙と会ってなんて言えはいいかわからなくて嘘ついちゃった。だから、謝ることが二つできっちゃった。」

「いいよ。なんだかホツとした。やっぱり俺は絵羽が好きだってこと、改めてわかったし。」

「でもね。一つだけ、約束守ったんだよ。」  
「え？」

「私が死ぬ前に『宙の誕生日には一緒にいる』って約束したよね。」  
「あ、覚えててくれたんだね。俺の誕生日。」

「忘れるわけないでしょ。だから、この三日を選んだの。宙の誕生日にちょうど一緒にいられるように。」

「ありがとう、そして絵羽をプレゼントしてくれたんだね。」

「ばか、ハズイよ。」

「あはは、やっぱり絵羽だ。俺の大好きな絵羽だ。」

「ありがとう。宙。」

そして、深く霧のかかるその場所で、二人は強く抱き合い口づけを交わした。

長く熱い抱擁が続いた。二人の失った時間を取り戻すように。少しずつ霧が晴れて空が薄い紫色に輝き始めた。

「宙、ごめんね。そろそろ行かなくちゃ。」

「え？今会ったばかりなのに。そりゃ三日間一緒に過ごしたけど、

絵羽としては今会ったばかりじゃないか。」

「うん、でもね。時間が迫ってる。天国へ帰る時間が……。」

「やだよ。今絵羽とこうして本当に思い残したことを話せるようになったばかりじゃないか。どうして？まだ、今日は終わってないよ。」

「私と会った。ううん、葵と出会った時間覚えてる？」

「え？うん、確か朝の四時頃。」

「今、何時？」

「え？あ、もうあと五分で四時だ。」

「そう、天国では時間がとても厳密なの。ちょうど私と会った時間に私は消えるの。」

「そんな。なんでもっと早く言わないんだよ！どうして、さっき言ってくれなかったんだよ！」

「……。ごめんね。」

「絵羽……、ごめん。頑張って本当のこと言ってくれたのに。辛かったのは絵羽のほうだね。ずっと我慢して葵として俺と会ってくれていたけど、本当は苦しかったんだよね。」

「宙……、ありがとう。やっぱり宙のこと大好き、私のことを本当にわかってくれるのは宙しかないよ。ありがとう。私……宙の彼女でよかった……。」

大粒の涙が絵羽の瞳から零れ落ちた。その一粒の涙に朝焼けの光が映り一層輝いた。

そして、その光が絵羽の身体に移り、足元から強い光を放ち始め

た。

「絵羽！！消えるな！絵羽！」

「宙！もう一度！もう一度キスして！」

宙は絵羽を抱き寄せ、その唇に唇を重ねた。同時に、宙の瞳からも大粒の涙が流れ落ちた。

確かにそこにいる絵羽の温度を感じながら、宙は自分のすべての感情を絵羽の身体に込めた。しかし、絵羽の身体は朝日と共に少しずつ消えていく。

二人は見つめ違い、お互いの身体を確かめるように再び力を込めて抱き合った。

「ありがとう。宙・・・もう、私のこと忘れていいからね。」

「忘れない！忘れるわけないだろう！」

「だめだよ。宙、私はもう過去、宙はまだまだこれから生きなきゃいけないんだから。私のことはここで忘れて、私の分まで生きて。そして、幸せになつて。」

「絵羽・・・わかった。絵羽の分まで生きる！でも、絵羽のことは忘れない。愛してる。絵羽、愛してるよ！」

「ありがとう。私本当に幸せだったよ。後悔はもうないから。宙も安心してね。」

「お礼をいうのは俺だよ。絵羽、ありがとう。俺にかけがいのないものをくれたよ。」

「ありがとう。宙、最後までやさしいね。大好き！」

絵羽は消えかかる身体の最後の力を振り絞って、宙に抱きつき再びキスをした。



「ありがとう。宙、元気で、そして、幸せになってね。さよなら。」  
「絵羽！――！」

朝日が、きらきらと輝いていた絵羽の姿をその強い光でかき消した。

さっきまで深く立ち込めていた霧が嘘のように晴れて、空が薄紫から真っ青に変化していった。

しばらく、宙はその場から動けず、呆然と立ち尽くしていた。

そして、とめどなく流れてくる涙をこらえることもなく、静かに泣き続けた。

「絵羽・・・、ありがとう。」

絵羽が消えた場所をふとみると、そこに光るものが落ちていた。拾い上げるとそれは、絵羽との出会いから一ヶ月の記念日にあげた初めてのプレゼントの指環だった。

「あいつ、これまだ持ってたんだ・・・。」

その指環をギュツと握り締めて宙は岬から海を見つめた。  
澄み切った真っ青な空と深い蒼の水平線が広がっていた。  
そのまぶしさに目を細めた宙は、大きく深呼吸をした。

「さあ！帰るか。」

くるりと海に背を向けた宙は、すっかりとした足取りで歩き始め

た。

そして、一度と振り返ることはなかった。

了

## 最終話：本当の旅立ち（後書き）

この物語はフィクションですが、実在する場所等もフィクションを交えて著しています。ですから、実際の風景とは異なりますので、ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4214d/>

---

霧の魔法

2010年10月8日15時49分発行